プランチョール村で考えたこと

～ これから生かそう国際協力の心 ～

平成10年度ネパール王国派遣
ジュニア協力隊員報告書

平成10年8月1日～8月8日

国際協力事業団
沖縄国際センター

JICA
116
36
01C
BRARY

JAPAN
Official Development Assistance

JICA LIBRARY
J 1146602 [6]
JR

目　　次

発刊にあたって…… 1

高校生「ジュニア協力隊」ネパールへ派遣－これから生かそう国際交流・国際協力の心－

沖縄県高等学校国際教育研究協議会会長　吉　平　龍　三…… 2

平成10年度ジュニア協力隊参加者リスト …… 4

「ジュニア協力隊」の実施要領…… 5

平成10年度「ジュニア協力隊」引率報告

沖縄県立北部農林高等学校教諭　千　葉　直　史…… 7

ジュニア協力隊員　個人報告

プランチョール村の学校を訪問して……北部農林高等学校2年　比　嘉　亜希子……18

ネパールに行って……中部農林高等学校3年　吉　田　さくら……20

私がネパールで感じたこと……南部農林高等学校3年　知　念　枝美子……21

ネパールで思った事、感じた事……八重山農林高等学校3年　前　竹　　亮……23

これからやらなければいけないこと……沖縄工業高等学校2年　玉　城　　充……27

「ネパールで学んだこと」……浦添工業高等学校2年　森　長　　恵……29

報告書……中部工業高等学校3年　玉　城　　豪……31

ネパール体験……那覇商業高等学校2年　佐　藤　祐　美……33

ネパールで感じたこと……中部商業高等学校3年　高江洲　涼　子……35

ホームスティを通して……八重山商工高等学校3年　新　里　昌　央……37

添付資料1　新聞記事……40

添付資料2　ネパール・暮らしのヒント……44

添付資料3　プロジェクト概要……45

添付資料4　現地新聞記事……52

関連ボランティア事業

青年海外協力隊とは（Japan Overseas Cooperation Volunteers）……53

シニア海外ボランティア事業内容……56

1146602 [6]

発刊にあたって

青年海外協力隊は、開発途上国地域の住民と一体となって、当該地域の経済及び社会の発展のために協力することを目的としています。1965年に当事業が発足して以来、延べ66カ国に、18,444名の日本の青年男女が派遣されており、その奉仕の精神と活躍ぶりは各国から高く評価されています。国際協力事業団は、「人造り、国造り、心のふれあい」をモットーとしており、日本の次代を担う世代が開発途上国の人々と共に汗を流す姿には、資金や物の供与だけの援助では得られない貴重なものがあります。

また一方で、青年海外協力隊に参加した若者も、環境の厳しい現地での活動を通じ、多くのことを学び、成長した自らに満足しています。帰国した隊員は、それぞれの道に進み、さらなる活躍が期待されています。

さて、当事業団では、平成10年度より新規事業として、我が国の未来を担う高校生を、短期間開発途上国に派遣し、国際協力の現場と途上国の現状に触れることを目的に「ジュニア協力隊」の派遣を開始しました。初の試みとなる今年度は、これまでの青年海外協力隊員派遣実績や当事業団の国内機関の有無等を考慮して、沖縄県、福島県、茨城県の３県にて実施することとなりました。この「ジュニア協力隊」派遣事業が開始される背景には、青年海外協力隊の募集説明会において、20歳以下の参集者が増加傾向にあることや、開発教育（国際理解教育）は小・中・高校から着手、強化すべきであるとの示唆があったことによります。

この度、全国に先立ち、沖縄県高等学校国際教育研究協議会（会長：吉平龍三氏）の協力のもと、募集・選考された沖縄県内の高校生10名と引率教師１名（県立北部農林高等学校教諭：千葉直史氏）が平成10年８月１日～８月８日の８日間、ネパールへと派遣されました。現地ネパールでは、沖縄県出身の協力隊員（村落開発普及員：宮田夏江隊員）の任地プランチョール村で住民が中心となった緑化運動の見学やホームステイ、学校の始業式参加及び授業参観、清掃活動を通じ、開発問題の端緒を体験しました。

今回沖縄県からの「ジュニア協力隊」が派遣されたネパールは、途上国の中でも経済的、物質的な生活環境が最も厳しい国の一つであり、青年海外協力隊派遣や無償資金協力といった我が国の援助の歴史も長く、一方で比較的治安が良いため、「ジュニア協力隊」派遣には適した国であるといえます。

今年度は沖縄県の他、福島県からフィリピン、そして茨城県からマレーシアに「ジュニア協力隊」が派遣される予定です。沖縄県での実績と成果が、関係各位のご参考となり、より充実した「ジュニア協力隊」派遣事業の一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、今回の沖縄県からの「ジュニア協力隊」派遣に際し、多大なご協力を賜りました、沖縄県国際交流課、沖縄県教育庁、（財）沖縄県国際交流財団、沖縄県高等学校国際教育研究協議会、そして「ジュニア協力隊」参加高等学校並びに多数の関係各位に対し、心からお礼申し上げます。

平成10年10月

国際協力事業団　沖縄国際センター　所長　山　縣　正　安

高校生「ジュニア協力隊」ネパールへ派遣

―これから生かそう国際交流・国際協力の心―

沖縄県高等学校国際教育研究協議会　会長　吉　平　龍　三
（県立北部農林高等学校長）

国際協力事業団沖縄国際センターの企画により、ネパールに「ジュニア協力隊」として県内高校生が派遣されました。「ジュニア協力隊」に参加した生徒は、現地の学校訪問や訪問校での生徒達との交流、清掃活動、学校生活ミーティング、ホームステイでの生活実体験などを経験し、８日間の訪問日程を終え帰国しました。ここに、訪問体験記が報告書として刊行されますことを本協議会としても大変喜んでおります。

本事業は、JICAの派遣する青年海外協力隊員が現地で活躍している実態を高校生に見てもらい、国際感覚と国際協力、国際貢献の在り方について考えてもらうことをねらいとした派遣事業と理解しております。

今回の派遣については、外国派遣のため、現地での生徒の健康管理や食生活への対応等、慎重を要するところもありましたので、県教育委員会へも派遣事業の主旨を説明し理解と協力をいただきました。

生徒の選考に当っては、生徒の応募書類、学校の推薦書、作文等に基づき、沖縄国際センターで協議され、調整の上決定されましたが、推薦された生徒達は、それぞれの学校で他の生徒の模範となる学校生活を送り、なお、海外についで興味・関心の高いところが作文を通して知ることができ選考されたものと思います。

沖縄国際センターでは、出発に先立ち、オリエンテーションを実施しましたが生徒達から「交流活動をとおして多くの仲間をつくりたい。」と抱負を述べておりましたが、帰国後の体験記で次のように語っております。

・学校に行きたくても行けない子供達、夢を持っている子供達の役に立ちたい。（北農・亜希子）
・協力隊員の役割は、現地の人々に対し自立心を持たせる方法を教えることだと強調していたので協力隊員の責任も大きいなと思った。（中農・さくら）
・人間が生きていくために必要とする衣・食・住について無駄なく活用していることを知った。（南農・枝美子）
・現地での植林作業はできなかったが、ネパール村落開発普及事業、森林保全計画、緑の推進協力計画などのプロジェクト事業に参加している隊員の意欲に感動した。（八重農・前竹）
・途上国は、自然と共生している様子が見えた。先進国は、開発によって自然を破壊し環境を悪くしている。自然の中で生きることが人の幸であると思う。（沖工・玉城　充）
・ホームステイで言葉の障害はあったが、お互いのジェスチャーで理解し合うことができた。ネパー

ル名で自分の名前を「マンジュウ」と名付けてもらい家庭的で楽しかった。(浦工・森長)

・壮大な自然の中でのびのびと生活している様子が見えた。(中工・玉城　豪)

・村の将来について、隊員が村人と村落開発プログラムについて取り組んでいる様子が見えた。

(那商・佐藤)

・食事の時、右手で食べる生活習慣にとまどいもあったが、ホームの家族は皆親切であった。

(中商・高江洲)

・学校訪問で授業参観をしましたが先生は一方的にしゃべり、生徒は十分理解しているのかなあと感じた。沖縄とは、授業風景がちがいびっくりした。(八商工・新里)

等々、ネパール訪問で多くの見聞の中からひとりびとりの感想を語っておりますがこの訪問を契機として、新たな発見とこれからの自分の「生き方」についてライフスタイルを築いてくれることを期待します。

本県においては、国際性豊かな人材を育成するため、高校生沖縄・ハワイ交流プログラム、高校生文化交流、専門高校生国際交流などの交流事業や人材育成事業が進められております。又、学校では、学校の特色を生かし姉妹校提携による交流事業、韓国、オーストラリア、カナダ等での体験実習などをとおして見聞を深めるための研修旅行等が実施されております。このように、行政や学校現場では、国際化時代に向け豊かな人材を育成するため多くの事業が進められております。このことは、沖縄が海外に雄飛していた長い歴史の中で培ってきた特殊性、県民性の持つ風土が影響しているのではないかと思われる。これからの国際化は、アジアの時代とも言われております。私達高校生として、若者として何ができるか。地域や社会がどう動いているか。高校生なりに見極める必要があると思います。

この度のネパール訪問で得た成果をそれぞれの学校で裾野を広げ、国際交流、国際協力の発信基地にしてほしい。

沖縄県での「ジュニア協力隊」派遣は、全国初の試みで多くの期待が寄せられておりますので、本協議会も学校現場への支援をしていきたい。

国際協力事業団沖縄国際センターにて実施された今回の「ジュニア協力隊」派遣に深く感謝申し上げ、本事業が今後継続実施され、多くの高校生に途上国を訪問する機会を与えていただければ幸いです。

平成10年度ジュニア協力隊参加者リスト

派遣期間：'98年8月1日～8月8日

派 遣 国：ネパール

番号	（ふりがな） 氏　　名	所属学校名　学科・学年
1	比嘉　亜希子（ひが　あきこ）	県立北部農林高等学校　生活科学科2年
2	吉田　さくら（よしだ）	県立中部農林高等学校　造園科3年
3	知念　枝美子（ちねん　えみこ）	県立南部農林高等学校　生活科学科3年
4	前竹　亮（まえたけ　りょう）	県立八重山農林高等学校　熱帯園芸科3年
5	玉城　充（たまき　みつる）	県立沖縄工業高等学校　工業化学科2年
6	森長　恵（もりなが　めぐみ）	県立浦添工業高等学校　デザイン科2年
7	玉城　豪（たましろ　つよし）	県立中部工業高等学校　自動車科3年
8	佐藤　祐美（さとう　ゆみ）	県立那覇商業高等学校　国際経済科2年
9	高江洲　涼子（たかえす　りょうこ）	県立中部商業高等学校　情報会計科3年
10	新里　昌央（しんざと　まさお）	県立八重山商工高等学校　商業科3年
	千葉　直史（ちば　なおちか） （引率教諭）	県立北部農林高等学校　熱帯農業科　教諭

1998年6月
国際協力事業団

「ジュニア協力隊」の実施要領

1．事業の趣旨

協力隊事業の実施機関である国際協力事業団が、国民参加型の事業として広く国民に開かれた国際協力への理解促進を図るべく、我が国の将来を担う高校生等を対象に国際協力の活動現場と途上国の現状に触れる場を提供することにより、我が国国民各層の国際化と理解を深め、幅広い視野を有する次代を担う人材の育成に努めることとする。

2．目　的

高校生等をアジアの途上国の援助現場に短期派遣し、ボランティア体験等を通じた人材育成と国際理解の涵養、国民参加型援助の裾野拡大、アジア・太平洋諸国との相互理解の増進に資する。

3．派遣国

ネパール王国

4．派遣人数（沖縄県について）

高校生　10名

引率者　1名（協力隊帰国隊員で現職の教師）

5．派遣日程（案）

平成10年8月1日（土）　沖縄発11：50J L757 香港経由ネパール着20：50

8月2日（日）　カトマンズからポカラへ移動　市内視察又は、隊員活動現場視察　〈ホテル泊〉

8月3日（月）　沖縄出身・宮田夏江隊員の任地へ移動、活動視察又は、ボランティア活動　〈ホームステイ〉

8月4日（火）　隊員活動視察又は、ボランティア活動　〈ホームステイ〉

8月5日（水）　首都カトマンズへ移動　〈ホテル泊〉

8月6日（木）　大使館及びJICA事務所表敬並びに報告隊員との懇談夕食会　〈ホテル泊〉

8月7日（金）　ネパール発13：00 TG312 タイ発22：20 NH1182　〈機 中 泊〉

8月8日（土）　関西空港着05：55　同発09：30 NH491　沖縄着11：30

6．募　集

沖縄県は、平成10年６月22日までに心身共に健全であり、本事業の趣旨を理解し、誠実に活動する意志を有する者の中から派遣対象候補者を選定し、国際協力事業団（沖縄国際センター）に通知する。

7．添付書類

(1) 沖縄県からの推薦書　(2) 本人からの参加申込書　(3) 保護者承諾書及び

(4) 作文　テーマ：ネパールの協力現場にて「自分達が出来る国際協力」又は、「応募の動機」

（原稿用紙２枚程度）

8．選　考

国際協力事業団は沖縄県からの推薦を受け、７月１日までに結果を沖縄県に通知する。

9．経費（予定）

(1) 国際協力事業団負担

沖縄からネパール間の往復渡航費（エコノミークラス）、国内旅費、査証料、滞在費、支度料（引率者のみ）、海外共済会特別加入、及び現地視察に必要な経費（視察用車両借上等）。

(2) 自己負担

パスポート取得料、その他個人的性格の経費等。

10．帰国報告

帰国報告会を、平成10年８月24日（月）頃行う。なお、帰国後一ヵ月以内に報告書を提出する。

以　上

平成10年度「ジュニア協力隊」引率報告

沖縄県立北部農林高等学校　教諭　千　葉　直　史
（青年海外協力隊セネガルＯＢ　平成５年度１次隊）

１．はじめに

今回、青年海外協力隊事業の実施機関である国際協力事業団が新規事業として実施した「ジュニア協力隊」の引率として、沖縄県下10名の高校生とともにネパール王国を訪問してきました。

現在、沖縄県には国際教育に関する高校教員の研究団体として、沖縄県高等学校国際教育研究協議会（本年度は北部農林高等学校が事務局）があり、県下の専門高校（農・工・商）22校が加盟しております。今回の「ジュニア協力隊」の実施に当たり、同研究協議会が窓口になり参加者を募集、10校10名の生徒を選考しました。

我が国の将来を担う高校生に国際協力の活動現場と途上国の現状に触れる機会を提供することにより、我が国国民各層の国際化と理解を深め、幅広い視野を有する次代を担う人材の育成に努めるというこの事業の趣旨は、将来のスペシャリストを養成する専門高校の教育理念に合致したものであると思われます。国際協力、特に技術協力の分野で将来、青年海外協力隊や専門家として活躍するに足る、国際性豊かな幅広い視野を持った産業人を育成することがこれからの専門高校に求められているのではないでしょうか。

今回、派遣された生徒たちは、様々な思いと期待と不安を持って参加したことと思います。また彼らなりに国際協力やボランティア活動に対して抱いていたイメージもあったと思います。実際、ネパールに行ってみて何を感じたでしょうか。

それについては、生徒たちがそれぞれ報告書で述べてくれると思いますが、途上国の厳しい環境で生活し、現地住民とともに活動されている協力隊員の姿を見、感動したことは間違いないと思います。また、沖縄・日本とは全く異なったネパールの文化・習慣・宗教・食生活・農業・教育等に触れ、生徒それぞれ何かを掴んできたことと確信しています。

このなかから将来、青年海外協力隊員として活躍する人が出てくるかどうかはわかりませんが、少なくとも国際協力の良き理解者として、またネパールファンとして国際交流の架け橋になることを期待しています。

今回、このような素晴らしい事業を企画し、推進していただいた国際協力事業団、当事業をご支援いただいた関係機関に深く感謝を申し上げます。そして、この「ジュニア協力隊」事業が今後も継続発展されることを期待し、派遣から帰国までの概要を報告します。

2．ジュニア協力隊参加者

氏　名	学 校 名	
比嘉亜希子	県立北部農林高等学校	生活科学科２年
吉田さくら	県立中部農林高等学校	造園科３年
知念枝美子	県立南部農林高等学校	生活科学科３年
前竹　　亮	県立八重山農林高等学校	熱帯園芸科３年
玉城　　充	県立沖縄工業高等学校	工業化学科２年
森長　　恵	県立浦添工業高等学校	デザイン科２年
玉城　　豪	県立中部工業高等学校	自動車科３年
佐藤　祐美	県立那覇商業高等学校	国際経済科２年
髙江洲涼子	県立中部商業高等学校	情報会計科３年
新里　昌央	県立八重山商工高等学校	商業科３年
千葉直史（引率）	県立北部農林高等学校	熱帯農業科教諭（JOCVセネガルOB）

生徒数10名

うち３年生６名　男子４　沖縄本島８　農業４・商業３　海外経験２（タイ・アメリカ）

２年生４名　女子６　離島２　工業３

3．概要報告

7月31日（金）

Ⅰ．出発前オリエンテーション（14:00～16:00）

場所：国際協力事業団　沖縄国際センター　セミナールーム №201 AB

・司　　会……沖縄国際センター業務課　伏見　勝利

・主催者挨拶……沖縄国際センター所長　山縣　正安

・来 賓 挨 拶……沖縄県高等学校国際教育研究協議会々長

吉平　龍三（県立北部農林高等学校々長）

※他 来 賓……沖縄県文化環境部文化国際局国際交流課交流推進係

係長　上原　兼治

・自 己 紹 介……ジュニア協力隊員及び引率教諭

・講　　話……「国際協力事業団（JICA）について」

「ジュニア協力隊について」

沖縄国際センター業務課々長　押山　和範

「青年海外協力隊（JOCV）とネパール」

沖縄国際センター業務課　伏見　勝利

・連絡・説明……日程の詳細と注意事項

帰国報告会ならびに報告書作成要領

沖縄国際センター業務課　伏見　勝利

出国手続きについて

国際サービス・エージェンシー　高久　毅

・沖縄国際センター内見学

Ⅱ　壮行会（16:30～18:00）

場所：国際協力事業団　沖縄国際センター　セミナールーム №201 AB

・開会の辞

・来賓紹介……沖縄県JICA帰国専門家連絡会々長

木崎　甲子郎（琉球大学名誉教授）

国際マングローブ生態系協会事務局長

馬場　繁幸（琉球大学助教授）

青年海外協力隊ネパールＯＢ　赤嶺　信夫

―歓談―

・ジュニア協力隊参加者代表の挨拶……中部農林高等学校造園科　３年　吉田　さくら

・閉会の辞

８月１日（土）

9：30　那覇空港国際線発着ターミナル集合

見送り　沖縄県高等学校国際教育研究協議会々長　吉平　龍三

沖縄国際センター　伏見　勝利

11：50　那覇空港発　ＪＬ757便

13：30　香港チェック・ラップ・コック空港着

16：30　香港発　ＲＡ410便（45分遅れ）

21：30　カトマンドゥ着（ネパール）

安部晋弘JOCV調整員出迎え

22：10　ホテル着

＜ホテル・キド＞（邦人経営）

☆　カトマンドゥの空港を出て、駐車場に止めてある迎えのマイクロバスに乗り込む間、距離としては100ｍもないが、その間自称ポーターやタクシーの客引きやらが群がってきて生徒たちの荷物を奪うようにして車まで運び、チップを要求してくるという事件があった。我々のように途上国慣れしているものにとっては、何んてことのないいつものことなので、気にせず簡単にあしらうのだが、高校生にとっては、まさに初めての途上国体験で、相当の恐怖感とカルチャーショックだったようである。引率のわたしも出迎えの安部調整員も空港を出るとき、生徒に特に注意しなかった点は反省すべきである。彼らは協力隊員ではなく、普通の高校生であった。

中にはしつこい要求にチップを上げてしまったものもいたが、いい経験になったのではないかと思う。ホテルに着いてから、あらためて途上国での行動上の注意とものをあげるという行為について説明をした。

生徒たちは昨日初対面で、まだどことなくよそよそしい感じがしたが、カトマンドゥで1泊したあたりから、和気あいあいとした雰囲気が出てきた。

8月2日（日）

9：00　ホテル発

9：30　カトマンドゥ空港国内線ターミナル着・チェックイン

11：00　カトマンドゥ発　ネコンエアー機

11：30　ポカラ着

宮田　夏江JOCV隊員、Mr. ギリ（JOCVローカルスタッフ）出迎え

☆　ポカラの空港には、宮田隊員がわざわざ出迎えに来てくれた。当初、ローカルスタッフだけの出迎えの予定で、時間にルーズで来ないかもしれないからその時はタクシーつかまえてホテルまで自力で行ってくれ、と言われていたので一安心。

12：15　ホテル着

＜ホテル・トラゴパン＞

13：00～　昼食（宮田隊員より村での生活について説明を受ける。）

14：00～　自由行動（ホテル周囲散策）

16：00～　JICAプロジェクト・オフィス訪問

吉田実専門家（チームリーダー）、宮田隊員よりJICA「村落振興・森林保全計画」及びJOCV「緑の推進協力計画」についての事業概要並びにネパールでの生活上の注意事項について説明を受ける（添付資料2～3　P44～51　参照）。

☆　プロジェクト・オフィスはポカラ市内、ホテルの近くで、ネパール側の協力機関である土壌保全局と同じ敷地にある。

吉田専門家と宮田隊員からJICA／JOCVのプロジェクトについてのOHPやビデオを使って説明をしてもらった。ここには各種ミッションがよく来るので、この手のものは常に準備されているとのこと。ただ、高校生には内容的にやや難しかったかもしれない。

18：00～　懇談会（於ホテル・トラゴパン）

JICA／JOCV側参加者

井手　　徹専門家（JOCVセネガルOB）

梅村　尚美専門家（　〃　フイジーOG）

吉田　　実専門家（　〃　ネパールOB）

宮田　夏江隊　員（村落開発普及員）

飯泉　尚子隊　員（システムエンジニア）

☆　参加していただいたJICA専門家はいずれも協力隊OB・OGで生徒たちも興味・関心をもっていろいろな話を聞けたのではないかと思う。

8月3日（月）

9：00　ホテル発

JOCV隊員連絡所に荷物を預ける

10：00～　ポカラ市内、バザール見学

13：30　プランチョール村（宮田隊員任地）へ向け出発（車3台）

40分程移動し、下車。各自荷物・寝袋を持ち徒歩にて移動。

30分程でプランチョール村の入り口にあるサイト・オフィス（宮田隊員住居兼用）着

宮田隊員よりオフィス内の説明を受ける

プロジェクトの事業として作った近くの小学校のトイレや共同水道を見学

☆　車を降りてから、徒歩での移動。雨も降っており、道はぬかるみ、ヒルにかまれながら山道を進み、宮田隊員の任地へ。ネパールの隊員任地の中では比較的平坦で、徒歩の距離も短い便利なところだそうだが、沖縄の高校生にはどう映っただろうか。20～３０分歩いただけだが、サイト・オフィスに着いたときには結構、バテていたようだ。

村の景観としては、田んぼにヒツジ、ヤギ、水牛。亜熱帯性の植生で、風土的に沖縄のヤンバル地方に似ていて、どこかホッとするような気分にさせてくれる。ただ、乾季であれば、正面にマチャプチャレ峰を初めとするヒマラヤの雄大な姿を拝むことができたそうで、至極残念であった。

16：00～　各ホームステイに移動

Santi Adhikari氏宅	比嘉亜希子・吉田さくら・知念枝美子
Lognath Adhikari氏宅	前竹　亮・玉城　豪
Bhim Prasad Adhikari氏宅	佐藤祐美・森長　恵・高江洲涼子
Krishna Poudel氏宅	新里昌央・玉城充
Tej Bahadur Poudel氏宅（村長）	千葉直史（引率）・吉田実専門家

20：00～　生徒の様子を見に家庭訪問

21：00　就寝

☆　予定していたホームステイ先のうち１軒ができなくなり、女子は３人１組で宿泊することになった。いずれの家も学校の先生か、元先生で、だれかしら英語のわかる人がいるのでコミュニケーションは取れていたようである。夕食後に様子を見に各戸を巡回したが、女子の方が積極的に交流しているという印象を受けた。食事も抵抗なかったようで、まだ体調を崩すものもいなかった。

8/5 村長Tej Bahadur Poudelさん
夫妻・お孫さんと筆者

ネパールは夜早く寝るので、夜型社会の沖縄から来ると暇をもてあそぶかもしれないが、何もないところでのこういう生活もいいだろう。

8月4日（火）

10：00　学校集合

公立で１～10年生までのクラスがある。

始業式に参加

生徒１人ずつ各クラスに入り、自己紹介。各クラスの先生の指示により一緒に清掃活動。

先生方に自己紹介

授業参観　英語（９年生、校長先生）

科学（10年生、この学校唯一の大卒の女性教員）

校長先生とネパールや日本の教育についてディスカッション

☆　今日は始業式だそうだが、生徒も先生も半分ぐらいしか来ていない。１学年１クラスで、10学年まである学校は村でここ１つだけ。日本の生徒も、ここの生徒といっしょに校舎の周りの清掃を行った。清掃は校舎周辺だけで、なぜか教室内はしない。汚いのに。

授業参観では、教師が一方的にしゃべり、生徒はノートを取るのみという授業に少々戸惑う。教科書、ノートのない生徒も結構いる。ただ、日本のように私語はなく、生徒は総じて熱心である。

12：00～　村内見学、水門や護岸工事などプロジェクト事業現場を視察

村人になったつもりで、この村に必要なことを考えさせる。

サイト・オフィスにてワークショップ

この村には何が必要か？　住民参加（画）型開発とは？

☆　当初、植林作業を予定していたそうだが、我々が来る前にほとんど終わってしまっていて、かなり離れたところしか残っていないので、植林は中止。そのかわりとして、宮田隊員がワークショップを実施してくれた。

村人になったつもりで、男女分かれて村に何が必要か話し合い、意見を出してもらった。男子はゴミ処分場や街灯、車道など今無くて外から導入したいものを、女子は歩道が不便だとか、栄養・衛生向上、水道など現状改善の意見が出た。実際に村での話し合いでも男女いっしょだと女性は意見を出しにくいので、男女別に会合を持ったりするそうだが、男女の視点の違いが出て興味深かった。さらにプロジェクトで進めている住民参加（画）型開発の難しい点や手法について簡単なレクチャーを受けた。

生徒たちの多くは、国際協力や援助について、ただ、ものやお金をあげるだけと思っていたようだが、住民の立場での効果的な援助とはどのようなものか、今日のワークショップで少しわかったのではないか。

16：00　スティ先へ帰宅

8月5日（水）

7：30　スティ先発

8：00　学校集合　徒歩にて下山。途中で車両にピックアップしてもらう

10：00　ホテル・トラゴパン<着替え・入浴・朝食>

11：30～　レイクサイトで自由行動（買い物など）

13：35　ポカラ空港着チェックイン

14：45　ポカラ発　ネコンエアー機

15：30　カトマンドゥ着　安部調整員出迎え

16：00　ホテル着　<ホテル・キド>

16：30～　市内タメル地区見学

18：00

19：30～　夕食

☆　2泊のホームステイを終え、あっという間にカトマンドゥまで戻ってきてしまった。生徒たちはカトマンドゥよりはポカラ、ポカラよりはプランチョール村が落ち着いていいと言っている。みんな田舎者か？と思ってしまうが、実際、カトマンドゥの喧噪と排気ガスは頂けない。

ホームステイ期間はもう1日位あってもいいと思う。今回、植林はできなかったが、村人との何か体験的な行事はやりたかった。

カトマンドゥについて、夕方少し時間があったので市内へ買い物に出たが、高校生は元気である。

8月6日（木）

8：45　ホテル発　JICA事務所表敬へ

9：30　長谷川JICA事務所長と懇談／報告

ネパールの新聞記者取材（添付資料4　P52　参照）

☆　長谷川所長は、沖縄国際センターでの勤務経験があるそうで、話がはずんだ。1名の生徒が、夕べから下痢気味と言うことで医療調整員に相談。薬をもらう。

10：40　市内観光

JICAローカルスタッフ　スシル・バッタチャン氏案内

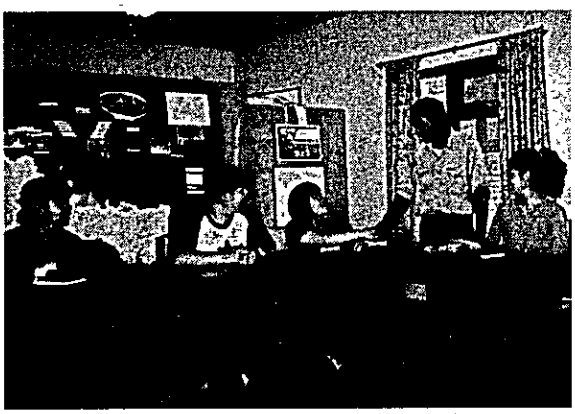
旧王宮<ダーバースクウエア、ハヌマン、ドカ>

↓

パシュパティ・ナート（ヒンドゥー教寺院・火葬場）

↓

ボダナート（仏教寺院）



8/6 ネパールの新聞記者による取材（於 JICA事務所）

↓

昼　食

↓

ホテル

☆　カトマンドゥの主な観光地は宗教施設が中心なので、若い高校生にはピンとこなかったかもしれない。しかし、パシュパティ・ナートの火葬場は引きつけられるものがあったようだ。ネパール人の死生観、宗教観を考える上では最適な材料であろう。

15：30　　ホテル発　在ネパール日本国大使館表敬へ

16：00～　四谷公使と会見

18：30～　懇親会（於ホテル・キド）

20：30　　安部調整員、協力隊員４名参加

☆　ついに下痢で１名ダウン。夕方の大使館表敬を欠席した。大使館では四谷公使と会見、生徒一人一人と丁寧に話をしていただき、またわざわざ玄関先までご自身が見送りに出てくださり、一同感激。お土産として、北部農林高校名物の黒糖を進呈した。

8/6 日本大使館表敬（四谷公使と会見）

８月７日（金）

９：00～　タメル地区で買い物

10：40

11：05　　ホテル発

11：30　　カトマンドゥ空港国際線ターミナル着・チェックイン

　　宮田隊員見送り

14：50　　カトマンドゥ発　ＴＧ312便

18：20　　バンコク着

22：20　　バンコク発　ＮＨ1182便

８月８日（土）

５：50　　関西空港着　入国・通関手続き

９：30　　関西空港発　ＮＨ491便

11：30　　那覇空港着

　　出迎え　沖縄国際センター　伏見　勝利

　　解散

☆　ハプニングもなく、無事、予定どおりに那覇へ帰還。乗り換えと機中泊、旅の疲れも出て生徒

たちはかなりくたびれた様子であった。

8／8　無事、沖縄へ到着（那覇空港）

4．総　括

☆　派遣人数・国・時期

派遣人数については、引率者１名に生徒10名は目が行き届き、行動もしやすく、適当な規模だと思われる。

派遣国のネパールは治安上の問題もあまりなく、高校生が旅行するのには良い国である。しかし、今回の派遣時期は雨季の真っ直中で病気や土砂崩れによる交通の遮断など懸念されることがらが多い（今回問題はなかったが）ので一考を要する。また隊員の活動も農閑期の乾季に集中しているとのことであり、高校生たちに隊員活動を経験させるにはこの時期が良い。今回は、体験より見学が主となった。

高校生を派遣するのには夏休みが最適と思われるが、３年生にとっては進学・就職の大事な時期でもあり、他にも各種検定や研修会、クラブの合宿、実習など結構行事が入っている。期間は短いが、生徒にとっては以外と冬休みや春休みの方が時間がとりやすいと思われるので検討してもらいたい。

☆　派遣日程・内容

飛行機の乗り換えなど移動に時間がとられ、実質中（なか）５日の滞在。しかも、隊員任地でのホームスティは２泊。非常に慌ただしいという印象がまず第一。せっかくスティ先の家族とうち解けたのにすぐ帰らなければならないのは残念であるとは生徒全員の意見であり、スティ先の家族も同様であった。

滞在が延びれば体調を崩す生徒が出てくる恐れがあるということも充分考えられるのでむやみに延ばすわけにはいかないが、せめて中２日の滞在は欲しい。今回は学校での始業式に参加、清掃作業と授業参観をしたのみで、村人との共同作業や交流行事があまりなかったのが少々残念である。できればこうしたものをプログラムできる余裕のある日程にしてもらいたい。

現地で対応してくれた宮田隊員や吉田専門家は、生徒たちにいろいろ伝えようと気を使ってくれ、充分すぎるほどであった。わずかな滞在日数で、しかも現地の状況もよくわからないものがいきなりボランティア活動などできるわけないので、今回のように隊員の活動視察が中心でよいと思うが、レクレーション的なものでよいから現地住民との交流行事が１つ入るとなおよいと思う。

☆　出発まで

今回、参加者に正式決定通知が来たのが出発２週間前であり、旅行準備についての連絡も直前まで行われず、生徒や保護者に相当不安を与えたようである。

初めての事業で、しかも沖縄国際センターと東京の協力隊事務局、ネパール事務所などとの調整にも時間がかかったようであるが、せめて出発一ヵ月前までには正式決定と詳しい旅行日程等が参加者に渡るようなスケジュールで企画してもらいたい。

事前学習としては、ネパール国の概要とJICA、協力隊のパンフレットが資料として各自に送付されただけで、あとは前日のオリエンテーションでの講話のみ。これで充分な事前学習ができたのか少々気にかかった。協力隊の活動を疑似体験するのが「ジュニア協力隊」の一つの目的と考えるのならば、“派遣前訓練”を体験させてもよいのではないか。

今回は、出発前日にオリエンテーションと壮行会を行ったが、参加生徒たちもこの日が初対面で、すぐにはうち解けられないし、実際、カトマンドゥで１泊したあたりから仲間としてのいい雰囲気がでてきた。仲間づくりには宿泊を伴った研修会の効果が高く、農業高校ではよく行われる手法である。ジュニア協力隊も個人派遣ではなく、一種のチーム派遣なのだから、訓練所での合宿研修を取り入れれば、それなりの事前学習とチームの雰囲気づくりに効果が期待できると思う。

例えば、出発１週間前に２泊程度（場所は国際センターや各協力隊訓練所）で実施した場合、

１日目　午前：入所式・オリエンテーション・所長講話など
　　午後：語学講座（講師はネイティブスピーカー、基本的挨拶など）
　　夕方：国際協力基礎講座
２日目　午前：語学講座（やさしい会話）
　　午後：任国事情（協力隊ＯＢが講師）
　　夕方：保健衛生講座
３日目　午前：語学講座（会話試験）
　　午後：旅行準備オリエンテーション・壮行会

と、上記のような内容も考えられる。

今回も英語でコミュニケーションはとれていたようであるが、やはり現地の言葉で挨拶をする

だけでも相手の態度は違ってくる。語学講座ははずせないだろう。これに任国事情と保健衛生講座が入ればかなり派遣前訓練を疑似体験できるのではないだろうか。せめて1泊で語学と任国事情の研修くらいは実施してもらいたい。

旅行準備については生徒・保護者も途上国への渡航経験もなく、ましてネパールなど見当もつかず、相当困ってあちこち問い合わせていたようである。服装・持ち物、旅行上の注意事項などを記した“修学旅行のしおり”的なものを作成し、事前に配布すべきであった。旅行にあたっては、参加する当の高校生より保護者の方が不安は大きいものなので、事前に、しかも早めに必要な情報を流し、不安を取り除く配慮は是非、必要である。

このあたりのことは、JICA職員よりは教員の方がなれているので、引率教員と事前に綿密に打ち合わせ、共同で資料作成を行った方がよいと思う。

☆ むすび

「ジュニア協力隊」の第1回の派遣にあたり参加した10名の生徒たちは、わずか1週間という短い期間でありましたが、様々なことを学び、感じてきたことでしょう。高校生という多感な時期のこの貴重な経験は、一生忘れることのない深い印象を心に刻んだことでしょう。人間的にも一段と成長したことと思います。今回参加した生徒たちが将来、どのような活躍をするか楽しみです。

高校生のボランティア体験等を通じた人材育成と国際理解の涵養、国民参加型援助の裾野拡大、アジア・太平洋諸国との相互理解の増進という当初の目的は充分に達成されたことと思います。この「ジュニア協力隊」事業が継続発展されることを期待しています。

最後に、この事業を企画していただいた国際協力事業団並びにご支援いただいた関係機関に心より感謝申し上げます。

プランチョール村の学校を訪問して

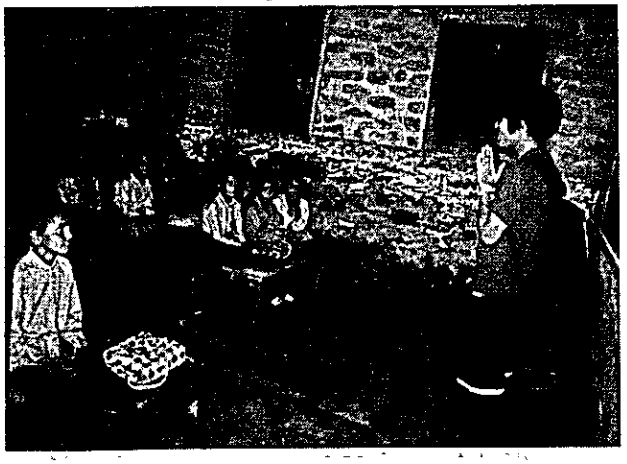
北部農林高等学校２年　比　嘉　亜希子

８月１日から８日までの約１週間、私はジュニア青年海外協力隊として開発途上国のネパールを訪れました。ネパールでは現地で活動している青年海外協力隊の活動内容を見学したり、ホームステイをして現地の人々と交流をしたりなど、短い間にいろんなところで途上国の現状を触れることができました。

私はその中でも、特に宮田隊員の任地・プランチョール村を訪れてホームステイをした２日目に、村内の公立学校を訪問した事が印象に残っています。私は将来学校の先生になりたいという夢があったので、ネパールの学校はどんな所だろうかと前日からとても楽しみにしていました。

ポカラのホテルから車で行ける所まで行き、途中からは約20分歩いて村まで行きました。ここの村は、交通量の多いカトマンズとは違って、静かで壮大な自然が多く、とても住みやすい所でした。学校は、私のホームステイ先の家から歩いて約10分の所にあり、この日はちょうど始業式が行われる日でした。私はホストファミリーに９年生の男の子がいたので、朝一緒に学校に行き、９時前に着きました。校門を入ると、まず広い校庭に目がつき、しきりがないためどこまでが学校なのか不思議に思いました。校舎は、ブロックみたいな物を積み重ね、セメントでかためられていて、１学年から９学年の教室が並んでいました。日本の学校より広くなく設備などが全く違っていたので、初め見た時は少し驚きました。

8/4 学校の始業式に参加



8/4 教室で自己紹介する比嘉亜希子さん

10時頃になると、青色のＹシャツの制服を着けた現地の生徒がたくさん校庭に集まってきて、各学年ごとに並び始業式が行われました。私も一緒に参加したけれど、ここの始業式は校長先生の話の後に全員で歌をうたうだけの短い式だったので、びっくりしたけどしうらやましかったです。

式が終わると、私達は１クラスに一人ずつ入り、生徒達の前で自己紹介などをしました。私は４年生のクラスに入り、「メロ

ナムアキコホ、ナマステイ。」

と、現地の言葉であいさつしました。4年生はまだ英語を習っていないので、会話にはとても困ったけど、私が知ってる限りのネパール語を使ってすぐにうちとけることができました。教室の中は電気がなく、外からの光だけだったので暗かったです。前には黒板があって、机といすは個別になく何人かで使えるようにつながっていました。女の子は家の仕事を手伝ったりしないといけないためにやめていく子が多いので、女性の方が知識は少なく、席も男女別々にすわっていました。

そして次は、現地の生徒達と清掃交流がありました。それぞれ入ったクラスの生徒と一緒に、割り当てられた清掃をし、私は校庭の石ころや落ち葉などを拾いました。道具は不十分だったけど、みんな一生懸命にやっていました。

清掃も終えて、次は9クラスの英語の授業に参加しました。授業を始める前は、簡単な内容かなと思っていたけど、実際に教科書などを見せてもらうと、とても長い英文に読めない単語とかがたくさんあって難しかったです。他にも、数学の内容が自分達とあまり変わらなかったのでびっくりしました。先生は一方的にしゃべって進めるばかりで、生徒達は理解できているのかなと思いました。鉛筆や消しゴム、ノートなどの筆記用具は、見た感じ不足しているなと思い、中には教科書を持っていない人もいました。私はこの現状を見て、今の日本は物があふれ豊かでぜいたくをしているけど、貧しい国のことを思うと、無駄使いはできないと実感しました。ここの授業は時間が決まっていなく、15分ぐらいで終わるところもあり、また鐘がなる前にはもう生徒がいなかったので驚きました。

一日学校を訪問してみたけれど、日本との違いなどをいろいろ学ぶことができ、とても楽しかったです。日本人は中3まで義務教育を受ける事ができ、私は今でも高校で学んでいる事に感謝し、毎日の授業もより頑張りたいと思います。途上国の貧しい国には、学校に行きたくても行けない子や夢をもって頑張っている子が多くいるので、私も頑張って将来は学校の先生になり、いつかはまた途上国を訪ねて仕事やボランティアで役立つ人になりたいと思います。

今回のネパール訪問は、このような目標を見つける事ができた他、初めての海外だったけど経験を通して視野に入れる事ができ、とても参加して良かったなと思います。英語をもっと勉強しようとか、もっと協力隊について知りたいと思うし、また自分だけでなくまわりの友達にも教えていけたらいいなと思います。この海外研修を計画・実施して下さった国際協力事業団やその他お世話になった方々に心から感謝します。他校の生徒との交流も含め、この経験は大きな財産になりました。

ネパールに行って

中部農林高等学校３年　吉　田　さくら

出発の日、ネパールという国はどのような国なのか下調べをしたが資料が少なく不安と緊張の反面、めったに体験する事の出来ない発展途上国ネパールでの暮らしを楽しみにしていた。その時はネパールに行くという実感がわかなくへんな気持ちであった。香港空港では乗りつぎをするため搭乗口で４時間まっているだけでくたくたになっていた。香港からカトマンズまで約４時間でついた。カトマンズの空港を出ると子供達がサービスといってカバンを運ぼうとするので、あまりの人数の多さにびっくり。その状況はタイでも経験していたのでショックはありませんでしたが、タイと状況がちがう事をあらためて感じました。その後、バスに乗り一息。同行していた友達は初めてのカルチャーショックと疲れでホテルにつくまでは無言でした。

２日目は、カトマンズからポカラへ移動し、ポカラの空港ではネパールの衣装であるクルタを着た宮田さんが出迎えてくれていました。それからホテルに行って昼食を食べ、その時に宮田さんからあしたのホームステイーでやってはいけない事、その村の生活状況などをおそわりながらあすのホームステイーの事を考えると仲よくなれるのかいっしょに生活できるのかとドキドキしていました。その後は、JICAの事務所をたずねて協力隊の仕事内容をビデオで説明してくれました。村の様子を話す宮田さんはとても生き生きして輝いているように見えました。

8/2 宮田隊員から日程説明を受ける
（ポカラ：ホテル・トラゴパン）

３日目は楽しみにしていたホームステイー先であるプランチョール村に移動です。あき子さんとえみ子さんといっしょで、私達がホームステイーした所は４人家族で初めは会話がなくただ座っているだけで何をしたらいいのかわからなく緊張していました。けれど名前を聞き合ったりしながら、いつの間にかうちとけ、いろいろな話しをしました。食事の時は、スプーンをわたされましたが私達はせっかくネパールにきたので、手を使って食事をし手でごはんをつかみ口に運ぶまでがとてもむずかしく、初体験でした。生水を飲んではいけないので、いつも飲み物があたたかく冷たい水が飲みたくてしかたがなかった。ホストファミリーはお母さんの（サンティ）さん、17才の女の子（プナン）と、15才の男の子（プスカール）、お父さんは出稼ぎに行っていて会えませんでした。会話は片言の英語とジェスチャーで通じ、数学の読み方や日本語を教えたり、おり紙や竹とんぼで遊びとても楽しかったです。私達３人にはそれぞれネパールネームをもらったの

で私達もホストファミリー一人一人に日本の名前をつけてあげました。よろこんでいたのでうれしかったです。ちなみに、私のネパールネームはコルパナという名前をもらいました。つぎの日は村の学校の始業式に参加し、校長先生など学校職員の人達と意見交換をしました。ホームステイーが終わる朝はとてもあわただしくちゃんとおわかれとお礼を言うことが出来なかったのが心残りです。2日間という短い間だったので、ネパールの人達が昼間どの様な仕事をしているのかわからなかったので、もっと期間があれば村の状況や生活、そして今ネパールにとって何が必要なのかが見えればボランティアにつながると思います。

協力隊の仕事を見るまでは、隊員が村に何が必要なのかを見つけ隊員だけでプロジェクトを進める事だと思っていましたが、現地での宮田さんの話を聞いて村の人達に今、何が必要かを話し合ってもらいそれをJICAで、できるのかどうかを検討して村の人達の力で作る、協力隊は必要以上手伝わないという事でした。それは今後、自分達だけでもやって行けるという自立心をもたせるためだと言っていました。ジュニア協力隊に参加するまでは協力隊の仕事がわからず誤解していました。だからこれからは、ジュニア協力隊の仕事内容を友達に話したいと思います。協力隊の仕事を手伝うことができなかったけれど、協力隊の仕事内容についてとてもすごい事をしているんだと感動しました。

私は将来、協力隊になるのかわからないけれどジュニア協力隊で学んだ事は、私にとって貴重な体験になりました。またもう一度プランチョール村に帰りたいと思っています。

最後に国際センターの方々、そのほか準備に携わってくれた方々、引率の千葉先生、帰る時体調をくずし心配してくれたジュニア隊員の友達お世話になりどうもありがとうございました。

私がネパールで感じたこと

南部農林高等学校3年　知　念　枝美子

異国の地ネパールへ、不安と期待で胸ふくらませて、初めての海外へ飛び立ちました。ジュニア協力隊のみなさんとはすぐに打ち解けられてよかったです。

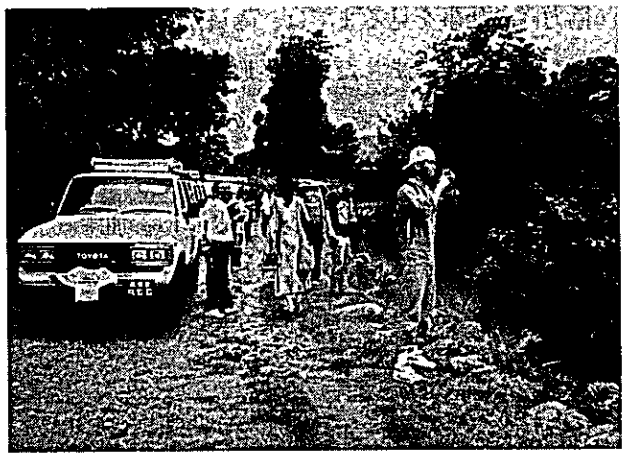
大きな荷物に、さらに長時間の飛行機、又移動が多く、やっとカトマンズに着いた時には、ホッとし、どっと疲れがでました。3時間15分の時間差もあり、1日目は長く感じられました。空港で、目に飛び付いたのが、大勢の人でチップ目当てに大人や子供が集まっているのにはびっくりしました。

2日目、ポカラへ移動をする空から見たポカラは森林が多く、大自然を感じさせられました。空港に着き宮田さんと合い、いっしょに昼食をとりながら、協力隊の話や、村での話などをしてくれ

ました。又夜は、他の隊員もきてくださり、協力隊の辛さや楽しさなどを聞く事ができました。それに、明日からのホームスティの話なども聞かせてくれました。

3日目、いよいよホームスティ1日目のスタートで朝から緊張していました。村の近くまで車で行き、途中からは、目的地までは歩いていくしかないという交通の不便さで、雨の降る中、足下の悪い砂利道を30分もかけて、やっと村に着きました。周りの景色さえ見る余裕もなく、ひたすら歩く事は、車社会になれた私にはとてもつらかったです。その道を、村の人は身軽に歩いていてその姿には関心しました。

ホームスティの家に着くと、子供が迎えてくれました。私達に紅茶を出してくれ、その間にいろんな話をしてコミュニケーションがとれました。ホームスティ先のお母さんが夕方帰って来て、夕食をいっしょに食べました。はしを使わず、手で食べる事は、むずかしかったです。しかし、家族のみんなは、大人も子供もきれいに手を使って食べていました。また、電化製品は、電気にラジオだけで、テレビに冷蔵庫、ガスもなく文明社会の自分達は、本当にぜいたくな暮らしをしているんだなと実感しました。ホームスティの2日目村の学校へ行き始業式に参加し、生徒といっしょに掃除などをしました。

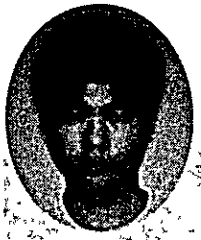


8/3 ブランチョール村へ ここより徒歩

朝になると、ホームスティの家族と握手をして別れました。言葉もあまりわからないままホームスティをしてだいじょうぶなのかと不安もあったけど、家族の人はみんないい人で、楽しい2日間になりホームスティはとても短く感じました。ホームスティはもうすこし長くてもよかったと思います。

ポカラからカトマンズへ移動して、次の日、大使館へ訪れ、村でのホームスティの出来事などを報告しました。

今回、ジュニア協力隊に参加した事で、今まで思ってた、介護をする、掃除をするそれだけが、ボランティアじゃない事に気づきました。人間が生きていく為に、最低必要な、衣・食・住を、自分達が出来るかぎりの力と能力で手助けする事を、ボランティアの言葉の中にある事を思いました。協力隊に参加し、貴重な体験で知る事ができました。これからは、体験した事を、自分の夢に役立てたいと思っています。



ネパールで思った事、感じた事

八重山農林高等学校３年　前　竹　　亮

７月31日に自分は、沖縄国際センターへ行きオリエンテーションに出席し、今回のジュニア協力隊の目的や参加者の自己紹介をしてネパール国がどういうふうな所か、ネパールでの援助にはどんな事をしているかの説明をうけた。自分はネパールの事を聞きインドににているのかなと思った。

８月１日、那覇国際空港で吉平先生の話しを聞き飛行機へのチェックをすませ待合室へ、そしていよいよネパールへ行く、11時50分、香港行の便に乗り香港へ、香港からネパール行の便に乗り変えるけれど、その間、待たないといけない。でも、待つ時間が長い、自分は香港で一泊するのではないかと思えた。ようやくネパール行の便に乗った。予定では17時45分発だったが45分遅れで出発しました。機内を見わたすと、みんな、インド人みたいだった。ネパールの人達は、遠くの席にいる友達と話しをしたり、スチュワーデスと気軽に話しをしたりしていて、沖縄のおじー・おばーの会話にみょうに、かさなって見えました。ようやくネパールに着き降りようとしたときに、ネパールの人と思われる人に、「エックスキューズミー、ユーアーチャイニーズ」と言われました。自分は、えっ、と思いいちよう「ノー」と答えましたが、ちょっと、ガックリしました。ネパール人も東洋人は、みんな同じに見えるかもと思いました。

空港では、JOCVの安部さんが出迎えてくれ、ホテルまで移動するバスにまず案内してもらいました。バスまでの移動中に子供達がむらがってきて、何をするのかと思っていたら、荷物持ちバスまで運び「お金をくれ」と言いだしてきました。さいわい自分は、その子供達に捕まらなかったけど、一緒にいた人達が子供に捕まりお金を請求されていました。その光景が自分には、怖いと思い、早くこの場所からはなれたいと思っていると一人の男の人が、なにかバスでホテルまで案内してくれる、地元の人と言い争うようにしていて、なんだか、荷物を持ったので金をくれと、言っているようで、その人がバスに身を乗りだし、いかにも、お金をもらうまで、ここから離れないと、いわんばかりの態度でした。でも、案内の人がその人を懸命に男の人をバスから離そうと頑張っていて、それが数分続きやっとバスから男の人が離れ、引率の先生や案内の人達をのぞいて、自分達は、ほっとしました。

なんだか怖かったけど、そんなに生活が苦しんかなと思いました。

やっとホテルにつき、チェックインをすませ、ゆっくりしていると、安部さんが、「話しがあるので集まって下さい」と言って明日の日程を話してくれ明日は、ポカラにまた飛行機で行動するそうでした。

８月２日、今日はポカラへ行動する日です。なれないせいか、暗いうちに起きてしまい、７時半まではひまでした。９時半にホテルを出発し国内線の空港へ行き空港に入ろうとすると、また、荷物運びの人がいましたが国際空港ほどではありませんでしたがやはり、荷物を運ぼうとむらがって

きました。その時に千葉先生が「こういう人達が空港にはいますので気をつけて下さい」といったので、自分達は、各自の荷物を運ばれないようにしっかり持って、空港に入り、荷物を預けました。空港内は、売店が少なくなく、本当にここか空港と思えるほどでした。数分たって、待合室に入り、待つこと約20分ようやく機内案内が始まり、バスで飛行機まで行動し、やっとポカラへ出発、30分でポカラの空港に着きました。

8/2 ポカラ空港到着

空港ではJOCVの宮田さんが出迎えてくれホテルまで案内してもらい、ポカラでの日程の事を話してくれ、地図が配布されましたが、自分は地図を見ても何が書いてあるのかさっぱり分かりませんでした。日程には12時から4時までは何もなかったので先生と一緒に、市内周辺を見て回りました。そこには色々な店があり、そのほとんどが観光客相手の店でした。その店などを見ているうちに戻る時間になったのでホテルへ戻り、JOCVのポカラ支部へ行き、事業説明や注意事項などを受けました。事業説明では、ネパール村落開発普及・森林保全計画・緑の推進協力計画の3つで、その中で5年間村落普及でやってきたものをビデオで見せてもらいました。それにはほとんど川にダムを造ったり、川の流れを柔らかくするものや川の流れを良くなるように工事をしている所が写しだされていました。なんであんなことをするのかなと思っていたら、宮田さんがネパールでは雨期になると雨がものすごい量で降ってくるので川などが簡単にあふれ、側面を削ったりするためにこういういふうな事をする必要があるということでした。で、その後1時間後ぐらいに自分達が泊まっているホテルで懇談会がおこなわれ、協力隊のみなさんがみえていました。

8月3日、今日はいよいよ宮田さんみているプランチョール村へホームスティする日がやってきました。自分はなんだかわくわくしてどんな村か今すぐ見てみたい気持ちでした。まずその前に、ポカラ市内視察へ行きポカラがどのような街かを見に行きました。街にはいろいろな店が並んでいてその中には、民族衣装の生地を専門に扱っている店、それを仕立てる店など路上販売店などいろいろありましたが家が一家も見あたらないのでなんでなのかなと思いきやここはバザールの通りでした。そこのバザールでは男女別々になり行動しました。そこでおもしろいことや感じた事などがいくつもありました。バザールには、路上販売が市内周辺より多く見られました。これを見て自分は、やはりネパールの人々は、生きるために、自分のできる事を仕事にし一生懸命に家族にご飯を食べさせているんだなと感じました。バザールの中で“へ”と思った商売が、体量計でした。自分は本当にこんなものがあるんだなぁとなんとなく納得してしまいました。市内視察や昼食も終え、いよいよ自分が楽しみにしているホームスティです。

プランチョール村へは、車で約30分ぐらいで、徒歩で30分山を登った所にある村です。村へ行く前に宮田さんが寝泊まりをしているオフィスへ行き、そこで地元の人でボランティアをしている人

に自己紹介をし、村に入る前に、もう一度、注意事項を聞きその中にこういう事を言っていました。それは、ここの子供にはむやみに私物を触らせない事、触らせたりしていると平気で、私物から何か物を取ったりするし、また、何かをあげたりすると、破ったり壊したりして物を大切にしないという事でした。ようやく村に入って初めに1組目のホームスティ先につき、一組目は3名の女子でした。次のホームスティ先に行き次はだれかなと思っているとなんと自分がホームスティする、ダーズバイのお宅で、自分と玉城豪君と一緒にお世話になる事になりました。ダーズバイ、お兄さんの家は、お父さん、お母さん、お兄さん、妹2人の5人家族でした。家には、水牛一頭に親牛一頭、子牛一頭の家畜がいて、家畜が多いほど家が豊かな家だそうです。この村には、“カースト”という身分制度があり、家を見るとすぐ分かりました。カーストの低い家は、屋根がかやぶきで、家の側面などが赤い色をしていました。自分達がホームスティする家はカーストの位が高くお坊さんになれる位だそうです。自分はここネパールはヒンドゥー教が社会制度をつくってるんではないかと感じました。なぜならばこの村には、あまりにもカースト制度が根強く残っているからです。自分は、この村は昔の日本と同じなんだなと思いました。

この家にホームスティする事がきまり、自分達が泊まる部屋をお兄さんに案内してもらいました。お兄さんは、自分達をいい所に案内してあげるよと言っていたので自分達はそこへ行く事になり、行ってみるとそこには、なんとも言えない、風景が一面に広がっていました。大きな声で叫びたいぐらいの絶景でした。ここのお兄さんは、英語がしゃべれましたが自分は英語ができないために豪君が通訳をやってくれました。豪君のおかげで助かりました。でも、あんまり自分はお兄さんとは話しませんでしたが豪君が英語を話せたので楽しくできました。何か3時ぐらいにベオティという白いオカラみたいな食べ物が出てきました。それは、水牛の初乳から作った物だそうです。ベオティは初め温かかったけど甘くおいしいものでした。歯ごたえはレバーみたいなもので一食べたらやめられないほど美味しかったです。夕食の時間になりお父さんから先に食事をすませ、次にお兄さんと自分達が食事をする番でした。食事のメニューは、カレーで日本とはちがい、親切なおじさんが作ってくれたインドカレーに似てて、味はしょぱかったです。でも食べている内になれ美味しく感じられました。最初スプーンがわたされましたが豪君が「手で食べよう」という事になり手で食べました。自分は、はしで食べても、手で食べてもいっしょだなと思い、食文化に変わりはあっても、食事の仕方は、手で食べるのと左手を使わないというだけで、さほど日本と変わりはないと感じました。ネパールの家庭の食事の仕方は、わんこそばを食べるみたいに、ごはんがなくなりそうになると、次から次へとごはんがつがれました。これで自分達は、何もお腹にはいらないほどでした。なぜ、こんなにたくさん食べれるのか考えたらネパールの食事が1日に2食という事でした。

8月4日、今日は村の始業式に参加して、生徒と一緒に、学校の清掃をやり授業に参加を2科目を30分ずつ見学する日程です。朝食も昨夜と同じで順番に食事をすませました。今日もカレーでした。9時30分までに学校へ集まり全員登校した所で始業式が始まり、意外と早く終わり、自分達は、各クラスに分けられ、自分は7年生のクラスに割り当てられました。7年生の清掃区域は、外の教室側の壁のコケ取りと草むしりでした。教室の中はなぜか清掃していませんでした。宮田さんに聞

くと、ここではあまり、掃除をする習慣があまりないという事でした。清掃が終わり、科目ごとの授業見学では、化学の授業は、先生が一方的に説明をしていて、生徒が内容を理解していなかったし、もう一つの科目の英語では、発音が違ってでもいいから、とにかく本を読ますというふうな押し付け的な授業のやりかたでした。学校見学が終わった後に、宮田さんのオフィスに行き、村落開発普及のやり方を、説明してくれました。そのやり方とは、村の人を集め、不便な事の話しを持ちかけ、村人に話し合いをさせて、それでも分からないようであれば、その事をしてもらい不便さを分かってもらい、その事をどうしたら、良い、解決策をみつけさせ、その計画を立てさせ、それを実行できるように、資金や、材料などを村人に提供して、村人達の手で物を作らせる、というふうな事をしているそうです。

8/4 宮田隊員による村落開発についてのワークショップ

苗木を植える作業は、もう終わっていてできませんでした。村に来て、子供達の遊びでえっと思うような遊びをしていました。それは、相手のほっぺたを、たたいて遊ぶものでした。豪君もその遊びを、一番下の妹にやったら、おもいっきりたたかれました。夕方、今日は、最後のホームスティの夜です。今日は、研修に来ているほとんどの人が民族衣装を着させてもらいました。とてもいい記念になりました。

8月5日、今日でこの村ともおわかれですが、最後にヒマラヤ山脈が見たくて、山が見える丘へ自分達だけで行き、運よく少しの部分だけ見る事ができ本当にいい思い出ができました。この2日間でお兄さんに、いろいろな単語を教わりました。例えば、ミカンはスンタラ、米はダーンなどいろいろ教えてもらいネパールが好きになりました。山を降りる時間になり、お父さんやお母さんにお礼をいって集合場所へ集まり全員がそろった所で山を降りました。一旦前に泊まったホテルへ行き、そこでシャワーを浴び、昼食を食べ空港へ向かいました。

カトマンズに戻り初めに泊まっていたホテルキドに行き、時間が余っていたのでちょっと市内をふらりと見て回りました。そこには、色々なものがあり、活気にあふれていました。

8/6 JICA事務所表敬訪問及び報告

8月6日いよいよ今が最後の日で10時にJICA事務所表敬に行き、吉田所長とプランチョール村でどういう風な事を感じ思ったかを話し合い、その後にポカラ市内を視察しに行きました。市内視察では、旧王宮

やその周辺の寺などを見たりヒンドゥー教のお寺に行き、火葬している所を見たりしました。あと、仏教の寺にも見にいき、その帰りに女の子が手を出し、何か食べ物をちょうだいというような事をな言って、自分の周りをついてきました。なにか怖いという気持ちはなく、かわいそうだなという思いで、いっぱいでした。

夜は、ホテルのすぐそばにある日本料理店で、カトマンズにいる協力隊の皆さんと、懇談会をやりました。そこには技術面を援助する人や学校の先生など色々な分野の隊員の皆さんが集まり話し合いもしながら、楽しい懇談会ができました。

8/6 カトマンドゥ市内観光（旧王宮）

8月7日、日本へ帰る日、自分はもう少しいて、いろんなことをやったりしたかったです。自分はネパールという国が好きになりました。また機会があれば行きたいです。

とてもいい勉強になりました。

これからやらなければいけないこと

沖縄工業高等学校2年　玉　城　　充

今の世界は悲しみに満ちている。この世界では善意といわれるものは、悪意というものにかき消されてしまっている。善意というものの影に常に悪意がかくされている。僕はそう考えた頃がありました。もしかしたら今もかもしれません。まわりでは今日も他人を信用せず、かげ口が続けられる。自分をまもるために。みんなオドオドして1日が終わるのを待っている。僕にはそう感じます。機械や便利なものを作りすぎたためにこのような世界をつくりあげてしまった。見ためでは幸せそうに見える先進国だけど、本当の姿はそのようなもので、本当に生きている人はいないと言ってもいいかもしれません。すべての人がそうとはいわないが、本当に生きるということを忘れてしまっていると僕は思います。

ネパールの首都カトマンズでは、車のはい気ガスのにおいがしてとてもくさく、スモッグみたいなものができていて空はうす暗く、とても生活できる環境じゃないと思いました。バスに乗って移動中、先進国の会社などを通り過ぎました。

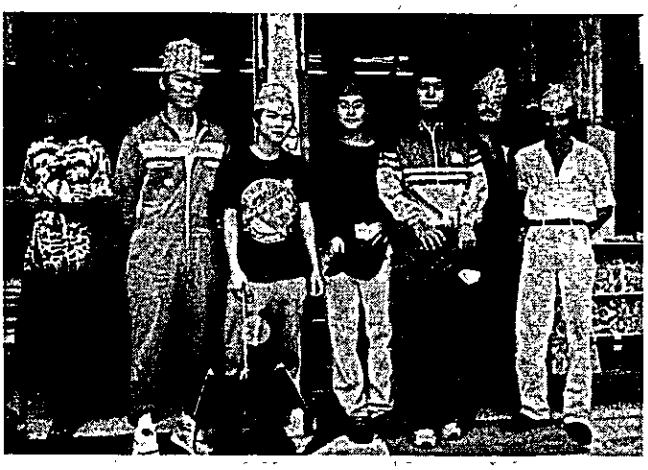
先進国があのような世界を作りあげたのではないでしょうか。最低限の破かいではなく、自分達の利益のため、又は人間だけのための、最低限をこえた破かいをおこなってしまったのではないで

しょうか。もしそれが発展というものなら決してしてはいけないと思います。先進国のようにしていいのでしょうか。発展とは何なのでしょうか。僕には良くわかりませんが、人間は間違った方向に進んでしまったのではないでしょうか。

僕達はポカラのプランチョール村へホームスティに行きましたが、そこはとても素晴らしい所でした。道路と水路はいっしょだし、設備はととのっていないし、先進国の人達から見たら信じられない所かもしれないけれど、心の目をひらいて見るとそこには、忘れかけていた人間らしさという言葉が見えてくるはずです。人間らしさとは本当に生きるとは、自然とともに自然に生きることではないでしょうか。だから僕は発展途上国と呼ばれている国々を先進国へみちびいてはいけないと思います。むしろ逆だと思います。先進国が途上国にみちびかれなければいけないと思います。つまり、助けられなければならないのは先進国ではないかということです。ネパールの村の自然はとてもそう大なものです。それにそこに住んでいる人もそう大な心を持っていると感じました。ほんの2日間だけの交流で言葉も通じず、そういった意味ではわかりあえなかったかもしれないけど、人としてはわかりあえたと僕は思います。ネパールの人達はあまりしゃべらないけどとても生命力にみちあふれていました。でもすべての人がそうではありません。時には「お金をくれ」とよってくる小さい子供やカバンをぬすもうとする人達までいました。それはゆう福ではなく、生きるために仕方なくやったことだと思います。ここまで追いやっているものは、僕達が毎日使っているお金ではないでしょうか。お金がなければすべての人が幸せになれるかもしれません。お金というものを作ってしまったためゆう福に差が出、それを得るために争いが起こるのではないでしょうか。自分達が作ったものをかけて人が生死を分けるなんてとても悲しいことだと思います。

発展途上国がなくなるには人が人ということを思い出すことが大切だと僕は思います。人は国家にも宗教にも何にもしばられない個人であり、自由だと思います。ここでの自由とは本当の自由のことです。そして、国境というものがなくなって世界がひとつになったら人類で助け合って生きていくことはできないのでしょうか。そうなったらすべての生き物が幸せになると僕は思います。

えらそうな事を書いていますが、本当は僕はそんな事がいえるほどの人ではありません。僕はもっと色々な事を見て考えていきたいと思います。ネパールへ行って知りたい事がありましたが、それを知ることはできませんでした。だから又ネパールへもどろうと思います。



8/3 ポカラのバザールにて

僕の答えはまだでていません。もう少し時間をかけて答えを探したいです。

一つみんなに聞きたいこともありました。自分のことを幸せと思いますか。

「ネパールで学んだこと」

浦添工業高等学校２年　森　長　　恵

ネパールには飛行機で１日かかってやっと着きました。カトマンズに着いた頃にはもう夜で、雨のあと風が冷たく、心地良かったです。空港を出て、ホテルのバスに乗るとき、浮浪者や子供たちが多勢寄ってきて荷物を持とうとします。最初何が何だか分からなかったのですが、それがお金をもらう為だったのに驚きました。

物の豊かな日本では決して見ることのない光景に、私は生活環境の違いを実感しました。

カトマンズの町は、何もかもが新鮮でした。建物に乱雑に描かれた映画やCMのロゴ、人々の服装、靴みがきをしている人、カラフルなバス。すべてが面白くて、見ているだけで楽しかったです。

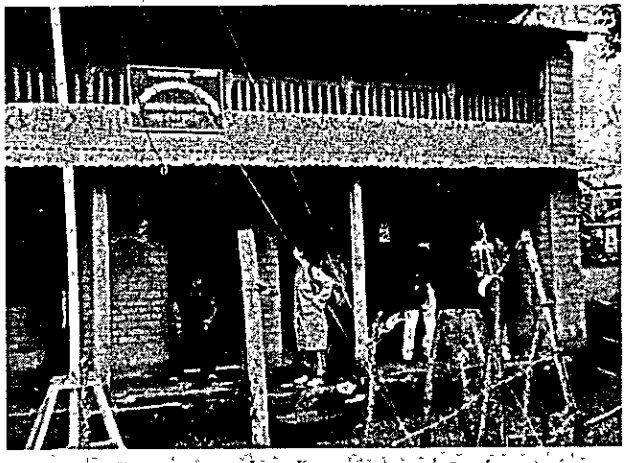
カトマンズから飛行機でポカラへ向かいました。低空飛行なので、飛行機の中から、家々や、段々畑がきれいに見えました。

次の日、プランチョール村へ車で行きました。村は山の中なので、途中から歩いて行かなければならなかったのですが、雨のあと道が悪くて歩きづらかったです。

村へ行く途中橋を渡りました。この橋は川の向こうに学校があるため、雨がふった日など「子供たちが渡るのはあぶない」という、村の人たちの意見で、みんなで協力して作った橋でした。

8/3 プランチョール村への移動途中

やっとプランチョール村に着いて、協力隊の宮田夏江さんの事務所に行き、そこで村での宮田さんの活動内容などを聞きました。



8/3 プランチョール村のJOCVサイト・オフィス到着

宮田さんは緑を推進する仕事ですが、村の人々に「木を植えよう」「共有林を作ろう」と言っても、今の生活で精一杯の村の人にそんな余裕はありません。だから人々の生活を改善していくことから始めるのだそうです。

私は初め、隊員がこの村のために、いろいろなことを行うのだと思っていましたが、そうではありませんでした。

村の人たちが集まりをもち、そこで改善

点や必要な事柄を話し合い、村の人みんなで協力しながら行うのです。隊員がやることは、みんなの意見をまとめたり、作業に使う材料や道具を一時的に提供したりする事でした。

それだと協力隊が帰ってしまっても、そのあと村の人々が「ここはどうしよう」とか、自分たちで改善していくことができるからなのだそうです。

そのあと私たちは、これから2日間ホームスティする家に、3人ずつそれぞれおいていかれました。初めは気楽に思っていましたが、いざ家についてそこのお兄さんを見たとたん言葉も通じないのにどうしようと不安になって逃げだしたくなりました。

8/3 ホームスティ先へ

でもお兄さんはやさしくて、私たちが来てすぐにミルクティーを出してくれました。

お兄さんは英語が分かるので、かた言の英語とジェスチャーで何とかなりそうでした。

私たちのお世話になった家族は、お父さん、お母さん、お兄さん、あかちゃんの4人家族でした。縁側に座った時も、お母さんがわざわざござを出してきてくれたりして、家族みんなのやさしい心遣いがとてもうれしくて、不安もなくなっていました。夕食では、御飯と豆のスープと和え物と煮物でした。やはり少し食べにくい味でしたが、日本とそんなに変わらないのでおいしくいただけました。そしてはじめて水牛のミルクも、こってりしていておいしかったです。

私たちは、左手を使わないように足にはさんだり大変でした。

次の日の朝、お兄さんと山を見に行きました。しばらく登って頂上につくと、そこには美しい景色が広がっていて、私たちはその壮大な自然に圧倒されてしまいました。ここの人々は何てステキな所に住んでいるのだろうと思いました。

その日は村の中を1時間くらい歩き、私が見て、どこを改善したいと思うかを考えました。そして、宮田さんの事務所で私たちが村人になったつもりでどこを改善したいか、男女に分かれて意見を出し合いました。

村で男女に分かれて話し合いを行うのは、女性が男性に混じって意見を言うのはあまり良く思われないため、男女で話し合うと女性が遠慮して意見を言わないからなのだろうです。私は、話し合いをするにしても、その地域の人々に考え方を合わせることは大事なことだと思いました。

私たちはその日の夜お父さんやお兄さんといろいろな話をしました。ネパールと日本の違いや日本の食物、習慣などを教えました。

その時に私たちはネパール名をつけてもらいました。私はマンジュという名でとても気に入りました。

次の日朝6時くらいに起きると、雲がなくて、山々がとてもきれいに見えました。

もう帰るのかと思うとさみしくなりましたが、最後にお母さんがミルクティーを入れてくれました。本当にやさしい家族で、帰るのがつらかったです。

私は、今回の派遣で協力隊の仕事を見て、言葉も習慣も違う所で現地の人と仕事をするのは大変なことだと思いました。

でも、宮田さんを見ていてとてもやりがいのある仕事だなと思いました。

宮田さんはエネルギーのある女性で、とても生き生きしていました。宮田さんを見ていて私もいろいろなことにがんばりたいと思いました。

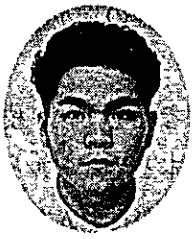
私は、ネパールで多くのことを学びました。

そして、今まで見えていなかった発展途上国の実情を知り、狭い視野で物事を見ていたことに気がつきました。

新聞やテレビで海外のニュースをやっていても、他人事のようにしか見れなかったのに、ネパールから帰ってきてからは世界が少し近く感じられました。

本当に今回のジュニア協力隊に参加する機会を与えて下さってとても感謝しています。

この経験を通して、これからは目先の事柄だけでなく、広い視野で物事を見て行きたいと思いました。



報告書

中部工業高等学校3年　玉　城　　豪

8月1日、那覇国際空港を出発し、香港で乗り継ぎネパールのカトマンズ国際空港に到着、空港を出た瞬間バスまでの道約10メートルの間に私が考えていたネパールの現状が塗り変えさせられました。私の考えではチップをねだる人などごく一部にすぎないと考えていませんでした。しかし、現状はそうではなく数えきれない人達が観光客の持っている物を奪ってでも車まで運びチップを貰おうとしていました。空港に着いていきなりの事で、先生以外の私達派遣団員にとって初めてのできごとでバスでホテルへ向かう間はもちろんあまりにも衝撃的なでき事だったのでホテルへ着いてからも終始無言でした。その日の夜は良く寝むれませんでした。

2日目、カトマンズを一時後にし、派遣隊員の吉田さん（専門家）、宮田さんが待つ、飛行機で約30分のポカラへ到着、空港ではすでに宮田さんが私達を待っていてくれました。ホテルで各自、荷物を部屋において昼食を取りながら宮田さんがこれからの予定と役立つ言葉を教えてくれました。その時に習ったネパール語はホームスティの時に非常に役立ちました。その後、JICAオフィスを訪問し、JICAのはたしている役割りや、今取り組んでいるプロジェクトについて詳しく聞きました。夜はポカラに滞在している隊員さん達も参加してパーティーがありましたが、その時にも色々

なアドバイスをしてもらいとても助かりました。その日の夜はとてもよく寝むれました。

8/2 吉田専門家よりオフィス内の説明を受ける

3日目の朝、村のホームスティ先へ行く途中にバザールによりました。あいにく天気は雨でしたが、それにも関わらず大勢の人でにぎわっていました。昼食後バザールを後にし、村へ向かいました。村までは車で約40分、歩いて約30分かかりました。村にある事務所でホームスティについて短いオリエンテーションをし、ホームスティ先へ行きました。ホームスティ先の家へは男子は2人1組、女子は3人1組になって分かれました。ホームスティ先の家では私達の為に寝る場所を準備して待っていてくれました。家の兄さんが山の見える場所へ連れていってくれました。そこではあまりの自然の大きさに驚きました。家に帰りグルティーという水牛からしぼった牛乳で作った豆腐みたいな物を夕飯の前に食べましたが、とてもおいしくて二杯も食べてしまいました。夕飯は右手使い食べましたが、とても塩からい料理だったので驚きました。真夜中に何かに刺されていると思い起きて電灯の明りをつけるとカヤの中に関わらず蚊が何匹か飛び回り、ヒルが首から歩いていました。部屋の中から外に出てみると、あたり一面真っ黒で、空を見上げると目に入りきれない程の星がありました。不思議な夜でした。

4日目、村の学校の始業式に参加し、生徒達と一緒に校庭の掃じをし、授業にも参加した後、校長先生がお茶を用意してくれて、校庭でお茶を飲みながら主に学校教育について日本とネパールとではどう違うのかを話し合いました。午後からは村のJICA事務所に戻り、「もし自分が村の人だったら今、一番何が必要か。」について話し合い、この時には男子、女子から違う目で見た必要な物の提案が色々出され、真剣になって話し合いました。この日の夜はネパール滞在期の中で一番楽しい思い出ができました。女子がバザールで買ったネパールの民族衣装を着ていたので男子の3人も家の人から衣装を借りて家族と写真を撮り村の人達とも写真を撮り、お互いに楽しく忘れられない思い出ができました。ホームスティ最後の夜は兄と色々な事を語り寝るのが少し遅れましたが、忘れられない夜になりました。

8/4 校長先生とディスカッション

5日目、名残りおしくもホームスティ先を後にし、村に別れを告げ私達はポカラへ戻り、飛行機の飛び発つまでの空き時間でポカラ市内を観光しました。そこでは山奥の村から出稼ぎに来ている

人達にしつこく付きまとわれましたが、すでに5日間の経験で成長していた私達は動揺することもなく断わることができました。市内観光もすませ、飛行場で宮田さんに一時の別れを告げカトマンズへ帰って来ました。さらにカトマンズ市内へお土産を買いに行き、人力車などにも乗り1時間を楽しくすごしました。その日の夜からお腹の調子が悪くなり下痢と気づきました。

6日目、カトマンズ市内にあるJICA本部へ表敬訪問をしました。その時にはホームスティ先や、ネパールに来てから感じた事などを色々聞かれ、皆自分の意見をはっきり述べていました。その後、私と先生は看護婦さんに薬をもらい、アドバイスもしてもらいました。午後からはJICAで働いているバッタチャンさんに市内を案内してもらい、昔王様が住んでいた旧王宮や、生き神様のお寺、火葬場、仏教寺、今現在王様が住んでいる王宮などを案内してもらいましたが、私が一番興味を持ったのは生き神様です。国王でさえも頭を下げると言われる生き神様とは誰なんだろうと思い、バッタチャンさんに訪ねるとなんと6才ぐらいからの初潮を迎えるまでの少女と言うのです。それに生き神様の間は年に一回の祭り以外は外に出られず一歩も地を踏めないし、役目を終わった後も生き神様だった女性達は結婚することもできず、さらに長生きしないと言われています。1日に数回顔を見せると言う生き神様の顔も見れてよかったです。午後、野外で食事を済ませホテルへ向かうバスの中で一度おさまっていた腹痛が高熱と共に私は襲われ、日本大使館表敬訪問とその後の夕食会も断念して私だけホテルの部屋で静養を取る事になったのですが、千葉先生や看護婦さんのアドバイス、ホテルの方々のお世話のおかげで翌日にはすっかり元気を取り戻す事ができて皆さんには感謝しています。

7日目、いよいよ沖縄に帰る日がやって来ましたが、私が滞在中に体験した全ての事は、新しい事ばかりでしたが私をとても成長させてくれたと思います。カトマンズを出発し、タイ、関西空港に着いたのは、8日目の早朝、沖縄に着き、共に同じ時間を過ごした仲間との別れは少しつらかったですが、7泊8日という短い期間で少しですが、ネパールの文化に触れ、つらい現実も知り、又、彼らが今何を必要としているのかも知りました。とても貴重な体験をしたと思います。

最近、よく頭に自然によく頭に浮かぶ事があります。「又、ネパールへ行きたいな。」

ネパール体験

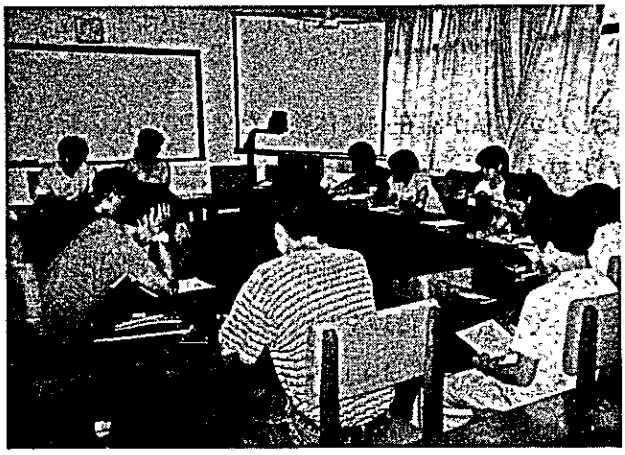
那覇商業高等学校2年　佐　藤　祐　美

ジュニア協力隊のプログラムを通して、私は未知の文化を意欲的に学びたい!!ボランティアの現場を見たり体験することで自分の視野を広げるチャンスであり、国際化時代に必要な見識を身につけ、将来に生かしたいと考え応募しました。そしてこのプログラムの参加が決まり私は、発展途上国への国際協力のあり方や、ネパールについてより一層興味関心がだんだんと大きく膨らんでいく

のが分かりました。また文化交流の中で現地の人々と相互理解を深められたら…などといろいろ自分の中での活動目標が立っていきました。

8月1日、丸一日をかけネパールに到着しカトマンズの街は夜で小さな灯がともり、まるで星空のようでした。飛行場に降り立ち好奇心と不安と緊張で心がいっぱいになりました。そんな気分に酔いしれて飛行場を出ると初めてのカルチャーショックを受けました。それは、10時近くにもかかわらず、子供から大人までの人々が外にひしめき合いその中の一人の男の子が近づいてきて、荷物を持ち「チップ、チップ」と言っているのです。恐くなり荷物を男の子の手からはなしバスに乗るとみんな驚きで呆然としていました。翌日カトマンズからポカラへの移動でさまざまな種類の色鮮やかなサリーを見ることができました。中には沖縄の紅型のような模様もありました。ポカラでは宮田さんがクルタスワールを身にまとい迎えてくれました。街の道は信号は無くクラクションの音が鳴り響き牛が歩き牛のフンもたくさんありました。

ネパール風の昼食後、JICAのオフィスで宮田さん達村落開発普及員という職種についてや活動の進め方について説明を受けました。そこで学んだことは村の土地生産の向上と自然環境の改善を目的とし、隊員中心でなく村の人々それぞれが話し合い意見を出し合い今、一番何が村に必要か考え、計画、実行と自分の村を良くしていこうと村人中心ということを改めて知り、宮田さん達はあくまで技術的、資金的な支援だけということです。



8/2 プロジェクトの概要説明
（於JICAプロジェクト・オフィス）

これらを円滑に実施するためには、村の人々との情報交換が活動を進める上で基盤となりそれが柱となることが大事だと感じました。

そして、村の人とJICAだけでなくNGO（非政府営利）やネパール政府などいろいろな機関の協力のもとで活動が行われていることがわかりました。

3日目は、ポカラの街でクルタスワールを作りに行った後、いよいよ宮田さんの任地であるプランチョール村へ移動です。しだいに街から離れ田舎へ近づくと道はでこぼこのあぜ道で、山がせまってくるようでした。車を降り30分程山を歩き、宮田さんのオフィスで休憩の後、女子3人1組、男子2人1組でホームスティ先へ行きました。家に着くと「メロナーム・ユミ・ホ」とネパール語で自己紹介をすると家の人も自己紹介してくれましたが早くて聞きとれませんでした。そして熱すぎるミルクティーを飲んで、家を見学しました。

まず自分たちの部屋を見渡すと、とても天井が低く、屋根は石で作られていて、壁は土色でした。台所はとても狭くコンロとはいえないコンロで、マキを燃やしてミルクを温めていました。

台所の天井にはたくさんトウモロコシが吊されているのに驚いているとお母さんが帰ってきて夕

食をはじめました。ごはんの量がとても多く、ダルという豆のスープトルカリ（煮物）・オツァ（扱え物）・ドゥダァ（ミルク）が出されました。ちゃんと右手だけで残さないというマナーを守り食べました。部屋は豆電球一つでしたが、十分明るかったです。翌朝、村の学校の始業式に参加し清掃の後、化学と英語の授業を見学しました。学校は体育館やプールなどはなく、教室も掲示物もなく殺風景です。授業は、先生がスラスラと説明しているだけで生徒が理解しているのかも、聞かず進めていました。また、生徒は、教科書も持たず私語もせずひたすら先生をみつめていました。生徒の年もバラバラで10才の子から20才ぐらいの人が１つの教室で勉強していました。同じ学生として感じた事は、日本は豊かすぎるということです。

同じ地球に住む一市民として必要な知識や姿勢を、このプログラムを通し少しでも多くネパールという国で体験し、日本の国際協力の現場を見て、自分自身の視野が広くなり、雄大な自然、生活、文化を吸収してきました。

活字では、学べないことを身につけ、また何らかの形で友人や周囲の人達にも伝えていきたいと思っています。

最後に、国際センターのみなさん、いんそつの千葉先生ありがとうございました。

8/4「科学」の授業を見学

ネパールで感じたこと

中部商業高等学校３年　高江洲　涼　子

ネパールに着いてまず、町の様子驚きました。牛があちこち歩きまわっていること、道路には信号がほとんどなく、自動車はクラクションを鳴らしてばかりいること。今まで日本から出たことのない私には、珍しいものばかりでした。

その中でも、一番興味を持ったのは、現地の女性の服装でした。サリーやクルタスルワールを着ている人がほとんどで、洋服を着ている人はあまり見掛けませんでした。文化を大切にしていて、それが当たり前のように生活に残っていると、私は感じました。

カトマンズでは、仏教やヒンズー教のお寺など、観光地をまわりました。街では、あちこちにゴミが散らばっているのが気になりました。

観光地で一番驚いたのは、火葬場でした。布で覆った遺体をまきの上にのせ、火をつけるのです。

その後、遺体は川へ流します。その向こう岸では子供が水遊びをしていたり、女の人が洗濯をしている光景は、私には理解できませんでした。ここの人達は、人間の死を自然なことだと受けとめているとのことです。

国が違えば、これほどまでに考え方も違うのだと不思議に思いました。

私が特に心に残っていることは、プランチョール村でホームスティを経験したことです。

その村は、山と水田に囲まれた緑豊かな所でした。住居は、トタン屋根の家に前庭、家畜小屋、トイレがあり、昔の沖縄の家にそっくりでした。家には水道がなく、近くの共同水道からホースをひいて水をくんでいました。

私達は、3人で一つの家にお世話になりました。初めはすごく心細く不安でしたが、家の人がとても親切ですぐに慣れました。そこのお兄さんが英語を話せたので、会話で困ることはほとんどありませんでした。

食事は一日二食で、ごはん（バート）、スープ（ダル）、じゃがいもとお肉の煮物（トルカリ）がでました。この時、初めて手づかみで食べました。想像以上に難しく、大変でした。あと、左手は物の受け渡しで特に使ってはいけないと注意され、気を付けていたのですが、お茶を出された時にうっかり、左手をのばしてしまったり、失敗もいくつかありました。

お兄さんがある朝、散歩に連れていってくれました。着いた場所は山の頂上で、そこからはたくさんの水田と、言葉では言い表せない程の大きな山が見えました。今まで見たことのない自然の大きさに驚き、感動しました。それは、どこよりも素晴らしい景色でした。

ホームスティ最後の夜、お母さんが私達にサリーを着せてくれました。近所の人達も皆集まってきて、まるで何かのお祝いのようににぎやかでした。

8/4 ホームスティ先の人たちと記念撮影

翌日の朝、家族にお別れをするのはとてもつらかったです。二日間という短い間でしたが、生活を共にすることで、人の暖かさに触れることができました。

心に残っていることのもう一つは、「緑の推進プロジェクト」について話を聞いたことです。

このプロジェクトは、森林保全、インフラ整備、収入向上等にとりくんでいるそうです。

しかし、森林保全については、住民の中に木を切らねば生活できない人がいたり、インフラ整備では、カーストや女性の地位が低いことで、話し合いや仕事に参加させるにはどうしたらいいか、問題もあったそうです。

また、どの活動にも限らず、反対する人がいたり、村長の力が大きく、そのせいで村の人達が協

力してくれなかったりする場合もあるそうです。

「女性の識字率が特に低い。」

私はこの時まで、識字率という言葉を知りませんでした。たずねてみると、字を読み書きできる人が少ないということでした。そのため、遠く離れた人と連絡を取るのに手紙は使えないそうです。

現地の協力隊は、村の人達が自ら考え、実行するための手助けで、あまり口をだしません。村の人達に理解してもらうには、時間と根気が必要だと私は思いました。何もかもを隊員でしきり、実行してしまう方が簡単かもしれません。しかし、それでは何も進歩せず、状況は変わらないのです。

ジュニア協力隊に参加して、学ぶことがたくさんありました。日本はいかに便利で暮らしやすい国かということ。ネパールは、日本に負けない魅力を持っていること。

ＪＩＣＡ事務所を訪ねた時、この言葉を聞きました。

「自分と違う価値観を認める。」

研修を終えた今、ようやく理解できた気がします。

ホームスティを通して

八重山商工高等学校３年　新　里　昌　央

沖縄県の高校生10名の「ジュニア協力隊」の一人として、ネパールへの派遣が決まった時は、とても嬉しかったです。しかし、それと同時に、本当に周りの人たちの期待している事や、２泊３日のホームスティなど、自分が、どれだけできるかという不安もありました。

８月１日、期待と不安の中、僕たちはネパールに出発しました。

飛行機の機内でも、いろんな事を考えたり自分は高校生の代表なんだという事を改めて自覚しました。

香港を経由し、ネパールの首都、カトマンズに着いた頃には、現地時刻の午後８時を過ぎていました。ホテルに着くと、つかれのせいでしょうか、すぐに寝ました。

２日目、カトマンズから、ホームスティをするポカラ市内にむかいました。ポカラの空港では、沖縄県出身の協力隊員である宮田夏江さんが出迎えてくれました。

8/1 出発前の記念撮影（那覇空港）

宮田さんは僕たちに、ホームスティを行うにあたっての注意事項や、ちょっとしたネパール語を

教えて下さいました。

そして、いよいよホームスティ先の村に行き、各家々に別れました。僕は玉城君といっしょに、アナンダラーズ・ポーレルさんの家にお世話になる事になりました。はじめは、言葉が通じず、とても不安で何を話していいのかわかりませんでした。しかし、ポーレルさんはいつも笑顔をたやさず、散歩や畑に連れてってくれたり、バナナなどのおやつを食べさせてくれたり、僕たちが不自由をしていないかなど、とても気を使って下さいました。

夕食の時にも、はじめの頃、右手で食べれない僕たちは、スプーンやあたたかい水などをいただきました。

僕は、ポーレルさんの3人家族と玉城君と5人で、同じ場所で、同じ食事をいただき、本当の家族の様に、やさしくしてくれた3人にとても感謝しています。

次の日、ポーレルさんの息子さんといっしょに、彼の通う小学校に行きました。その日小学校は始業式だったので、それに参加し、それから生徒たちといっしょに、みんなで校庭の清掃をしました。自然にかこまれた、とても美しい学校で、校庭を走り回る生徒たちの顔が、今でも印象に残っています。

8/4 生徒とともに清掃活動

清掃後、2つのグループに別れて、英語と化学の授業に参加しました。日本と比べ、先生の授業の進め方や、生徒たちの授業態度に多少のちがいを感じ、驚きました。

学校を後にし、宮田さんの事務所（サイトオフィス）に向かいました。歩きながら、宮田さんの提案で、この村に必要な物は何かとか、どんな工事が必要かなどを考えながら事務所に向かいました。途中、協力隊員が行なったという事業を見せていただきました。村の人といっしょに行なったという事業は、村人にとっては、なくてはならないものばかりでした。僕個人の意見としては、こんなに大きな川があるのだから、水車を、もっともっと増やしてはと思いました。

僕は、たった2泊3日のホームスティだったけど、いろんな刺激を受け、また学びました。

日本はネパールに国際協力として、いろいろな事をしてきました。募金活動以外にも、技術協力というすばらしい活動を行なってきました。

8/4 JOCVの援助で行った護岸工事現場視察

ネパールで何度も言った「ナマステ」という言葉を思い出す度、大切なのは、人と

人とのコミュニケーションからだと思います。現地で何が足りないかとか、何をした方がいいと外部からきた人が判断するのではなく、現地の人とのふれあい、生活の中から、現地の人の悩みなど聞いてやり、そこから村人を中心にし、隊員たちの支援が始まると思います。

アジアの中には、たくさんの途上国がありますが、しかし、日本におとっているわけではないと思います。その土地、その土地の中で、育まれた文化を大切に生活していると感じました。

僕はネパールという国で、文化や習慣のちがいをのりこえ、相手に何かをしてやるのではなく、自分に何ができるかという事をふまえて、まず小さな勇気から始まることを学びました。

今度の派遣は、とても短かったけど、自分にとって本当にいい経験になりました。

添付資料１

「琉球新報」紙掲載

平成10年８月１日（土）朝刊

国際協力事業団

県内高校生 ネパール派遣

植林など奉仕活動で

全国初 きょう出発

青年海外協力隊で途上国に隊員を派遣している国際協力事業団は、「ジュニア協力隊」として沖縄の高校生十人を、ネパールに派遣する。全国に先駆け初めて実施されるもの。一行は一日、那覇空港を出発し、八日間の予定で現地の隊員と共に、ホームステイをしながら植林などのボランティアに加わる。

出発に先立ち三十一日、浦添市の沖縄国際センターで行われたオリエンテーションでは、山縣正安所長が「途上国の活動の現場に触れ、国際性あふれる人材育成を目指している。現地では一人でも多くの友人を作り、文化や価値観の違いがあることを実感してきてほしい」とあいさつ。

県高校国際教育研究協議会の協力を得て、作文などの選考を経て決定した十人の高校生は、工業、農林、商業といった職業高校に通うメンバー。

八重山商工高校三年の新里昌央さんは「言葉や文化は異なるが、同じアジアに住む者として、自分の限界を試してみたい」と抱負を述べた。

セネガルに青年協力隊として赴任経験のある北部農林高校の千葉直史さんが引率教諭として同行する。

８日間の予定で、ネパールに派遣される「ジュニア協力隊」の高校生ら＝31日、浦添市前田・沖縄国際センター

国際協力体験してきます

ネパールなど高校生派遣

1日からネパールに派遣される「ジュニア協力隊」のメンバー＝浦添市・沖縄国際センター

ネパールでボランティア活動などを体験する「ジュニア青年海外協力隊」が一日の出発を前に三十一日、浦添市の国際協力事業団（JICA）沖縄国際センターで壮行会があった。

参加するのは県内の実業高校の生徒十人と引率の教諭一人。八日までの一週間、現地でのホームステイやネパールの生徒たちとの交流、日本の援助現場の視察をする予定。また植林も行い、実際に国際協力を体験する。

隊員を代表して県立中部農林高校三年の吉田さくらさんは「知らない土地での生活で不安もあるが、協力隊の活動を見てボランティアの在り方などを考えたい」と話した。

ジュニア協力隊はJICAの本年度新規事業。高校生をアジアの開発途上国の援助現場に派遣し、ボランティア体験などを通じ、アジア・太平洋諸国との相互理解を深めることが目的。初年度は沖縄、長野、茨城県の高校生などを対象に実施される。

「琉球新報」1998年8月25日（火）朝刊

ネパール体験 役立てたい

ＪＩＣＡ事業で訪問

高校生10人が報告

国際協力考える契機に

国際協力事業団の「ジュニア協力隊」帰国報告会が二十四日、浦添市の沖縄国際センターで開かれた。将来を担う高校生に国際協力の活動現場と途上国の現状に触れてもらい、視野の広い人材の育成につなげるのが協力隊の狙い。県内の高校生十人が参加して全国で初めて実施され、一日から八日までの日程でネパールを訪れた。

参加者はホームステイや学校訪問を通した現地の人たちとの触れ合いなどを振り返り「今回の経験は自分にとって大きな財産」などと日々に協力隊の感想を話していた。

比嘉亜希子さん（北部農林二年）は「将来は貧しい国に行って学校に行きたくても行けない子、夢を持って頑張っている子を伸ばしていけるような先生になりたい。ボランティアや仕事で役立つ人になりたいと思う」と話し、ネパール訪問で将来の目標が見つかったことを報告。「ネパールの人たち、他校の生徒との交流は大きな財産」と話した。

知念枝美子さん（南部農林三年）は「介護や掃除だけがボランティアではない。生きていくために最低限必要な衣食住に、自分ができるだけの能力を尽くすことがボランティアだと思う。体験したことを自分の夢に役立てたい」と話した。

報告に先立ち、山縣正安沖縄国際センター所長は「現地の文化に直接触れ、いろいろなことを経験したと思う。それぞれの国際理解への手助けとなり、立派な国際人として育つことを期待したい」とあいさつ。引率した千葉直史北部農林高校教諭が概要を紹介した。

「ジュニア協力隊」メンバーがネパールでの体験を通して考えたことを発表した帰国報告会＝浦添市・沖縄国際センター

「沖縄タイムス」1998年8月29日（土）朝刊

ネパール体験語る

JICA ジュニア協力隊

【浦添】高校生に国際協力の現場を見てもらい、理解を深めようと実施された国際協力事業団（JICA）の「ジュニア協力隊」の帰国報告会が二十四日、浦添市前田の沖縄国際センターで開かれた。

一日から八日までネパールに派遣された十人の高校生が、現地での様子や参加した感想などを述べた。

同事業は本年度から実施され、第一回目の派遣メンバーとして沖縄の商業、工業など専門高校に通う十人が派遣された。ホームステイをして現地の人々の生活に触れたほか、現地で活動している青年海外協力隊員の活動内容などを見学。公立小学校を訪れ奉仕活動をしたり、子供たちと触れ合った。

吉田さくらさん（中部農林高三年）は「協力隊とは、彼ら独自でプロジェクトを進めるものだと思っていたが、現地の人の自立心が失われないよう、今何が必要かを話し合ってもらい、JICAで検討するものと知った」と語り「向こうでは食べ物を手でつかんで口に入れるのが大変だった。ステイ先のファミリーにネパール名をつけてもらい、うれしかった」と話した。

知念枝美子さん（南部農林高三年）は「介護や福祉だけでなく、人間に最低限必要な衣食住を、自分たちにできるだけの力で協力してあげるのも、ボランティアなのだと知った」と感想を述べていた。

現地で協力隊の活動を学び国際協力の理解を深めた高校生ら＝浦添市・沖縄国際センター

添付資料２

ネパール・暮らしのヒント

１．食　事

１日２食（朝８～10時頃と夜７～８時頃）とおやつ（午後のお茶）です。

食事の内容はバート（米飯）、ダル（豆スープ）、タルカサ（野菜カレー）で、それにアチャール（漬け物・和え物）やサーグ（青菜炒め）がつくこともあります。ネパール人は上手に右手だけで食べますが、慣れるまでは大変なのでチャムチャ（スプーン）で食べて良いでしょう。食べ終わったら、周囲の人がどうしているかを見て、各自で食器を洗っているようだったらまねをしてみて下さい。ゲストに食器を洗わせることは珍しいのですが、やろうとする姿勢だけでも喜ばれることがあります。

※水や食べ物はよく火が通ったもの以外口にしないよう注意して下さい。

２．住　居

民族によっても異なりますが、だいたい家畜小屋付きの母屋と前庭、トイレです。水道が各家庭にあることは非常に珍しく、だいたい道ばたの共同水道にみんなで水くみに行きます。

３．衣　服

学生は男女とも制服。それ以外では、女性はサリー（既婚者）クルタスルワール（未婚者）、男性はダウラスルワールか洋服にトピ（ネパール帽）というのが一般的です。村では女性が洋服姿で歩くのはまだまだ珍しく、田舎にいくと外国人の女性を洋服のせいで男性とまちがえることもあるようです。

４．トイレ

トイレのある家庭では、トイレに水がおいてあるか確認して入り、使ったら水をたしておくようにします。便器の構造上、トイレットペーパーを流すとつまるので、ペーパーを使ったら持ってかえるようにしましょう。

５．その他

万が一持ち物をねだられてもあげないでください。写真をとってあとで送ってあげるだけで充分です。

言　葉

ナマステ＝おはよう、こんにちは、こんばんは、さようなら、ありがとう

（デーライ）ダンニャバッド＝（本当に）ありがとう

フンツアｏｒティクツア＝よろしい、ＯＫ（疑問文にも使える）

ソーリー＝ごめんなさい

添付資料3

ネパール村落振興・森林保全計画
ネパール緑の推進協力計画

1998年5月1日

プロジェクト概要

相手国関係機関：森林土壌保全省　土壌保全流域管理局
Mr.M.P.Wagley (Director General) ほか
カスキ郡土壌保全事務所
Mr.H.M.Bhandari (District Soil Conservation Officer) ほか
パルバット郡土壌保全事務所
Mr.P.P.Paudel (District Soil Conservation Officer) ほか

協力期間：1994年7月16日～99年7月15日

JICA：村落振興・森林保全計画
長期専門家　柳原保邦（チームリーダー）
井手　徹（業務調整）
池田恵子（WID）
飯島康夫（流域管理）
清水　正（村落振興）

JOCV：緑の推進協力計画
長期専門家　吉田　実（チームリーダー）
隊員　樋山千春（カスキ郡デウラリ）
渋谷優子（カスキ郡モウジャ）
島田俊子（カスキ郡アルバ・ピジャエ）
清水直樹（カスキ郡バムディ・チャパコット）
宮田夏江（カスキ郡プランチョール）
和久田敦子（カスキ郡クリスティ・ナツネチョール）
吉野貴之（パルバット郡シルバリ、バンガラ）
遠藤　薫（パルバット郡タバタナ）
吉澤靖子（パルバット郡トゥリポカリ）
飯村理恵（パルバット郡トリベニ）

協 力 の 背 景：当国の森林、林業行政組織については、林業部門マスタープラン（1989～2010）が策定されて以降森林土壌保全省の部局新設が相つぎ、他の中央行政組織と同様にトップ・ヘビーな組織となっていたが、民主化（90年）後の92年11月に各省庁の幹部の８割以上の人員整理と続く93年９月に各省庁の組織簡素化が断行され、現在形式上は小さな中央政府の下に地方組織（地方分権政策を含む）の充実を指向している。

そのマスタープランにも示唆されているが、当国の環境問題は地方の貧困に起因する天然資源の収奪的利用に主として関係しており、JICAが91年より94年まで実施した林業普及計画の報告によれば、山間部地域の天然資源の持続的開発・利用は地域村落の直面する各種の切実な開発／振興ニーズと一体処理していかなければ実現されない事が示されている。つまり山間部地域の村落住民は、その生活を天然資源、特に森林に依存していることから、村落住民の生活を直接改善・向上させる開発／振興事業（当然森林を中心とする環境に優しい事業）を、広範な住民参加により実施・展開していくことが、森林への利用圧力を直接軽減しつつ森林が再生される住民の生活サイクルを確保することにつながり、延いては森林減少を食い止め荒廃した森林資源の回復を図る有効な手段となることが明らかになってきている。

この協力のパッケージ、①村落振興・森林保全計画（JICAプロジェクト）、②緑の推進協力計画（JOCV プロジェクト）及び③西部山間部総合流域管理計画（JICA 開発調査）はカスキ、パルバット両郡（約12万ha）において、村落の住民のニーズとイニシアチブーこれがプロジェクトの重要な要素であるがーに基づき生活水準の向上のための事例的村落振興活動の展開を通じて、地域の土地生産性の向上と自然環境の改善に寄与することを目的に実施される。

協 力 の 手 法：① JICAプロジェクトは各地方組織と協力して、JOCVプロジェクトのモニター／プロモーター（M／P）チームを介して、個々の村落振興活動の計画の策定・実施に関して政策的・技術的・資金的な支援をタイムリーに行う。山間部にて展開されるM／Pチームのための協力手法の支援や必要な各行政レベルでの調整なり、即時即決を旨とするバックアップ・ベースとして機能する。また、複数の村落にまたがる活動、流域管理や適切な土地利用指針策定のような課題についてはJICAプロジェクトが主体的に担当し、M／Pチームと共に各村落間の利害等の調整を図ることになる。地域主動／参画による振興計画の円滑な実施のために、プロジェクトにてある一定のシーリングや基準をもった資金的な支援（資材等）を実施することとなる。また、これまでの地域振興対策から漏れていた社会的弱者、女性や子供への十分な配慮を講じた活動が展開出来るよう、その支援のため

の施策を検討することとなる。

JICAプロジェクトのアプローチは従来の研修センター型協力やデモンストレーションとしてのモデル／パイロット・インフラ整備事業を展開していくアプローチとは若干異なり、当該地域にてM／Pチームと協力しつつ、直接草の根レベルで各村落を「面的」にカバーしながら地域振興を通じた流域の環境保全を図っていくものである。

② JOCVプロジェクトは10のM／Pチーム（JOCV職員、ローカルボランティア及びDSCO職員1名ずつにて構成）を山間部村落に配置しつつ、住民が自らのニーズを認識／掘り起こし、参加型村落振興計画として立案・実施・管理していくことを支援する。各M／Pチームは常駐する村落（サイト事務所を設置）周辺の村落（毎年平均で3～5村落）を対象地域とし、1つの村落グループへの協力期間は平均3年と考えている。最初の1つの村落グループへの協力展開に加えて、M／Pチームは次年度以降準備整い次第、アクセス可能な新たなる村落グループへの協力を順次開始することとなる。M／Pチームの第一期の配置については、村落選定基準に基づきカスキ郡6チーム、パルバット郡4チームとなっている。同チームの10人のローカルボランティアとそれを支援するフィールド・マネージャー（3名）エンジニア（2名）については、公募選定作業を経て委託したローカルNGOから供給を受けている。

③ 開発調査については、94年12月のコンタクト調査団の結果を踏まえて、95年6月にS／Wが締結され、対象地域における既存の土地利用形態／ニーズを踏まえた長期的総合流域管理計画（含む一航空写真、地形図、土地利用／植生図、土壌図、地質図、崩壊危険予測図）の策定のための現地調査と、協力開始時点における両郡の社会経済状況に関するベースライン調査がそれぞれ実施され、97年度中に最終的に取りまとめられ、提出された。

④ この協力のパッケージにおいては、当国の方針である行政組織の簡素化と権限・規制の緩和及び地方分権政策（Decentralization）の観点から、「民活」は重要な協力項目の1つであり、協力・事業展開を通じて自立的・持続的な組織でかつ地域住民と一体となったローカルＮＧＯ等を育成・支援していく必要がある。

協力の内容：(1) 協力対象地区／区（行政区）

地域に根ざし・地域のニーズに基づく草の根レベルのアプローチを指向している当プロジェクトでは、区（1つの村ＶＤＣは9つの行政区から構成されている）

を協力の単位としてキメの細かい協力を実施する。対象地区は開発調査にて区画された小流域（モデル・エリア）の区域を踏まえつつ、選定基準に則して選定される。

(2) サブ・プロジェクトの内容

当プロジェクトにて支援される活動はサブ・プロジェクトと呼ばれ、サブ・プロジェクトはその活動に関係するグループ（利用者グループ）により実施される。サブ・プロジェクトの事業内容は利用者グループのニーズの大小と受容力及びプロジェクト側の予算的制約に照らして決定される。

住民との対話促進の視点及び事業活動の便宜上、サブ・プロジェクトを次のとおり分類・整理している。

① 区域内事業

a．基盤整備計画

b．森林・流域保全計画

c．所得向上計画（約80％は女性及び非優遇者グループ向けで、残り20％はモデル農民向けとする）

② 複数区間事業

a．森林・流域保全計画

b．訓練と普及

(3) 予算と経費分担

区域内事業における各区への予算シーリング（事業期間は3年間）は20万ルピーとする。ただし、実際の各区への予算配布はプロジェクトの判断に依るとする。複数区間事業への予算は別途各M／Pチームより取りまとめられるニーズと提案に依ることとするが、95／96年度の予算は、一件あたり約50万ルピー、96／97年度の予算は約75万ルピーである。

各サブ・プロジェクトはプロジェクトと利用者グループ間にて取り交わされる契約（両者の役割と責任をネパール政府の政策に則して明記）によって規定される。一般的に、プロジェクトからの予算は地元で入手出来ない資材の調達、熟練工・技術者の経費及び契約書に明記された金額を越えない範囲で地元資材の一部分の調達・運搬に支出される。

(4) ジェンダー配慮

意志決定のプロセスと便益を共有する視点から、女性の参加に最大限の配慮をするサブ・プロジェクトは優先的に採択される。活動の開始に際しては、利用者グループの運営委員会には最低50％の女性参加を奨励している。

(5) 情報の普及活動と社会経済調査

当プロジェクトは草の根レベルの地域に根ざしかつニーズに基づくアプローチをとっているところであり、その概念／手法を対象地区の全ての住民に浸透する必要がある。M／Pチームはそれぞれの VDC（村落開発委員会）当局の支援を得て、対象グループへの頻繁な訪問と対話によって必要な情報を普及させることとなる。

対象区の社会経済調査は対象利益享受者の社会経済状況、主要天然資源の賦存状況、対象グループの抱える課題、既存の基盤整備状況と種々の所得向上事業の可能性に焦点が当てられる。この調査の結果については関係者間で各サブ・プロジェクトの円滑な計画形成と承認のため共有かつ活用される。

(6) 制　限

サブ・プロジェクトの採択審査に当たっては、非優遇者グループと女性に対する差別を通じて社会的反駁を招来させかねないもの、住民間の社会経済的ギャップを拡大するもの、また関係村落に対して負の環境的影響を及ぼすものについては採択の制限因子としている。

現　　状：(1) 協力対象村落（ワード）

① カスキ郡

	95／96	96／97	計
デウラリ	5	4	9
モウジャ	5	4	9
アルバ	5	4	9
チャパコット	5	4	9
プランチョール	4	5	9
クリスティ	5	4	9
小　計	29	25	54

② パルバット郡

シルバリ	5	5	10
タパタナ	5	4	9
トゥリポカリ	5	4	9
トリベニ	5	3	8
小　計	20	16	36
合　計	49	41	90

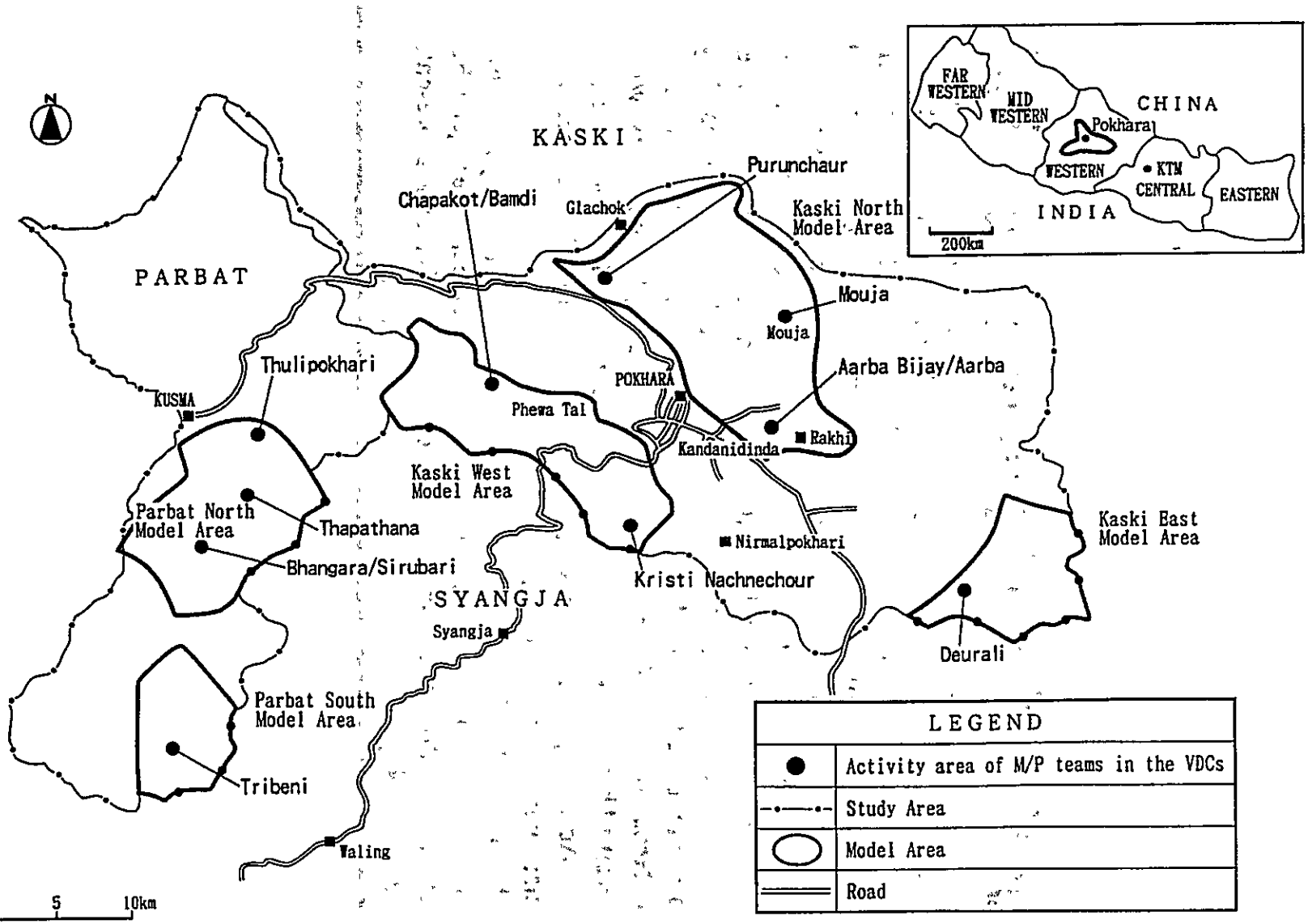
(2) 複数区間事業

① 95／96年度

デウラリ	護岸工	618,000 Rs.	(総工事費の61%)
モウジャ	歩道改良工	296,000 Rs.	(51%)
アルバ	潅漑水路改修	350,000 Rs.	(78%)
チャパコット	釣り橋	1,573,000 Rs.	(83%)
プランチョール	釣り橋	884,000 Rs.	(81%)
クリスティ	山腹及び渓間工	255,000 Rs.	(49%)
シルバリ	地滑り工	235,000 Rs.	(76%)
トゥリポカリ	地滑り工	613,000 Rs.	(68%)
トリベニ	渓間工	194,000 Rs.	(74%)
合　計		5,020,000 Rs.	(71%)

② 96／97年度

デウラリ	護岸工	921,000 Rs.	(74%)
モウジャ	地滑り工	489,000 Rs.	(71%)
チャパコット	護岸工	509,000 Rs.	(66%)
プランチョール	地滑り工	484,000 Rs.	(71%)
クリスティ	林道改修工	2,086,000 Rs.	(80%)
シルバリ	地滑り工	158,000 Rs.	(51%)
トゥリポカリ	地滑り工	N.A.	(%)
タパタナ	歩道改良工事	371,000 Rs.	(50%)
トリベニ	渓間工	959,000 Rs.	(78%)
合　計	N.A.	(%)	


N
KASKI
PARBAT
SYANGJA
Chapakot/Bamdi
Glachok
Purunchaur
Kaski North Model Area
Mouja
Mouja
Aarba Bijay/Aarba
Rakhi
POKHARA
Phewa Tal
Kandanidinda
Thulipokhari
KUSMA
Kaski West Model Area
Parbat North Model Area
Thapathana
Bhangara/Sirubari
Nirmalpokhari
Kristi Nachnechour
Kaski East Model Area
Deurali
Syangja
Parbat South Model Area
Tribeni
Waling
0 5 10km
FAR WESTERN
MID WESTERN
CHINA
Pokhara
WESTERN
KTM
CENTRAL
EASTERN
INDIA
200km
LEGEND
Activity area of M/P teams in the VDCs
Study Area
Model Area
Road

「The Kathmandu Post」紙掲載
1998年 8 月 8 日（土）

JOCV from Okinawa in capital

By a Post Reporter

KATHMANDU, Aug 7 - JICA HDQ Tokyo, dispatched a team of ten member high school students as Junior JOCV from Okinawa prefecture from 1st to 7th of August 1998, to study the activities of JOCV in the Kingdom of Nepal, states JICA press release received here today.

According to the release, the main purpose of their visit is to obtain a first-hand experience at the grassroot level in rural area and to deepen friendly relationship with people in Nepal.

Through exposing themselves in the Nepalese Society, the Junior JOCV will understand different culture, social value, system and expect to become prospective resource persons in the global context in future, says the release.

During their stay in Nepal they visited Pokhara, and experienced homestay, planted trees with Nepalese students and held a meeting with JOCV members and local people.

The team was led by N Chiba, ex-JOCV member in Senegal, who is a teacher in Okinawa at present, the release adds.

青年海外協力隊とは
(Japan Overseas Cooperation Volunteers)

歴　史

青年海外協力隊事業は昭和40年外務省所管の事業として発足し日本青年海外協力隊事務局として設置されました。昭和49年国際協力事業団（JICA）の重要な事業として受け継がれ、名称も青年海外協力隊となり、今日に至っています。

ラオスへの初派遣から33年間で66ヶ国（アジア、アフリカ、中近東、中南米、大洋州、欧州）へ18,444名（1998年８月31日現在）が派遣され、1998年８月31日現在、開発途上国の59ヶ国へ協力隊員2,287名（約160職種）が派遣されています。近年は女性隊員が増加し、現在1,124名（49.1％）が活動中。

沖縄県からは1998年10月31日現在累計174名が派遣され、現在16名が活動中。

目　的

協力隊員の活動の基本姿勢は、現地の人々と共に生活し、働き、住民の言葉を話し相互理解を図りながら、住民の自助努力を促進させる形で活動することです。つまり開発途上地域の住民と一体となって当該地域の経済及び社会の発展に協力することが目的です。

募　集

隊員の募集は年２回春と秋に行われています。

募集規模は毎回約160種、800人程度が募集されています。

（応募資格）

① 海外での協力活動に支障のない心身共に健康な20歳から39歳までの日本国籍を有する者

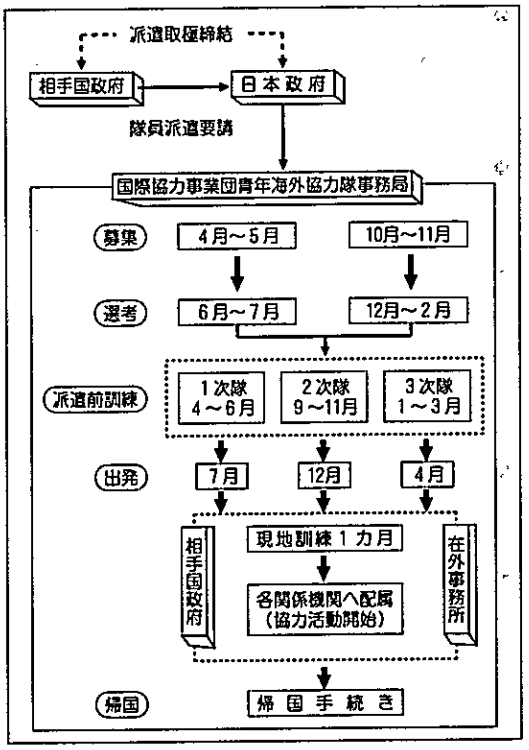
② 自ら海外協力活動に参加しようとする自発意志と奉仕精神を有し、異文化の人々と共にする協調性のある者

③ 異文化のなかで協力活動を実践するのに必要な語学的素養と適応力を有する者

④ 単身で赴任できる者

活動期間は２ヶ年で、隊員候補生の訓練（約２ヶ月半）のあと、要請に基づいて派遣され、各国の関係機関に配属される。単身赴任が原則。

青年海外協力派遣システム



単独での派遣が多いがチームで活動する場合もあります。

概　要

- 活動形態は村落型　教室型　現場勤務型　本庁・試験場勤務型など
- 職種は農林水産部門・加工部門・保守操作部門・土木建築部門・保健衛生部門・教育文化部門・スポーツ部門で累積では教育文化部門が25.5%、農林水産部門が24.0%を占めています。
- 隊員の待遇としては、海外での活動に係る経費として、現地生活費や住居費等を支給される他、災害補償制度も設けられております。

問い合わせ先

【青年海外協力隊について】

〒151－8558　東京都渋谷区代々木2－1－1　新宿マインズタワー6F

国際協力事業団　青年海外協力隊事務局

電話　03－5352－7261

【国内問い合せ先】

国際協力事業団国内機関等

- 北海道国際センター（札幌）

  〒003－0026　札幌市白石区本通16丁目南4－25　TEL 011－866－8333

- 北海道国際センター（帯広）

  〒080－2470　帯広市西20条南6丁目1-2　TEL 0155－35－1210

- 東北支部

  〒980－0811　仙台市青葉区一番町4－6－1（仙台第一生命タワービル15F）

  TEL 022－223－4772

- 二本松青年海外協力隊訓練所

  〒964－8558　二本松市永田字長坂4－2　TEL 0243－24－3200

- 関東支部

  〒336－0002　浦和市北浦和4－5－5（北浦和大栄ビル7F）　TEL 048－834－7770～4

- 筑波国際センター

  〒305－0074　つくば市高野台3－6－2　TEL 0298－38－1111

- 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

  〒399－4117　駒ヶ根市赤穂15　TEL 0265－82－6151

- 東海支部

  〒460－0002　名古屋市中区丸の内2－4－7（愛知県産業貿易館西館8F）

  TEL 052－221－7103

● 北陸支部

〒920－0853　金沢市本町1－5－3（リファーレビル3Ｆ）　TEL 076－233－5931

● 大阪国際センター

〒567－0058　茨木市西豊川町25－1　TEL 0726－41－6900

● 中国国際センター

〒739－0046　東広島市鏡山3－3－1　TEL 0824－21－6300

● 四国支部

〒760－0050　高松市亀井町5－1（百十四ビル13Ｆ）　TEL 087－833－0901

● 九州国際センター

〒805－8505　北九州市八幡東区平野2－2－1　TEL 093－671－8349

● 沖縄国際センター

〒901－2552　浦添市字前田1143－1　TEL 098－876－6000

シニア海外ボランティア事業内容

1．シニア海外ボランティアとは：

シニア海外ボランティア事業は、近年ますます増えつつある開発途上国からの技術援助の要請に応えるため、並びに国内にいる幅広い技術・豊かな経験を有する中高年の方でボランティア精神にもとづき、途上国の発展のために貢献したいという人々の強い希望を実現させることを目的に設定された支援事業です。

2．シニア海外ボランティアの役割：

- 派遣受入国の公的機関等に所属し、相手国の人々と密着した“草の根レベル”の協力
- ボランティア精神にもとづき、かつ幅広い技術・知識と豊かな経験を活用した協力

3．指導業種分野のあらまし：

(A) 文　化	(B) 社　会	(C) 行政・経済	(D) 科学・工学
(E) 建設・土木	(F) 運輸・通信	(G) 農林水産	(H) 保健・医療

4．資　格：

- 40歳から69歳（派遣時）までの当事業に自発的に参加する意志を有する方
- 人格に優れ、心身ともに健康である方
- 開発途上地域の経済社会に貢献しうる技術・知識・経験を有する方

5．登録手続き：

当事業は、登録制度をもとに実施されています。登録をご希望の方は、200円切手を同封し登録カードをご請求のうえ、必要事項を記入して、シニア海外ボランティア事業係に提出してください。登録時に特に審査はしておりません。

6．選考方法：

応　募：年2回登録者の方に送付される『シニア海外ボランティアニュース』により、各国からの派遣要請の内容をご紹介しますので、希望する要請があればそれに対し応募していただきます。

第1次選考（書類審査）：登録カード等を要請内容と照らし合わせ審査いたします。

第2次選考（健康診断）：一次選考を合格した方には、指定項目についての健康診断を受けていただきます。

（面　接）：指定会場で面接を行います。なお、規定にもとづき交通費を支給します。

（語学試験）：中学校卒業程度の英語の試験（英検3級程度）を受けていただきます。

7．研　修：

(1) 派遣前オリエンテーション：派遣前に2週間、派遣前オリエンテーションを実施します。随伴する配偶者もこの研修を受けることができます。本事業の制度説明の他に、任国事情、渡航準備の説明や健康管理等についての講義を行います。

(2) 語　学：派遣先で業務を円滑に行うために不可欠なのは、相応の語学力です。これを身につけるために派遣前に3週間の集中語学研修を行います。

8．派遣期間：

1年ないし2年です。

9．待遇など：

(1) 年齢、経験に関係なく、同一の派遣国については同一の待遇が保証されます。

(2) 当事業団規定にもとづき、渡航費と滞在費が支給されます。

(3) 随伴家族のための手当が支給されます。

(4) 無職で参加する方には、国内積立金が支給されます。

(5) 労災保険（特別加入）および事業団災害補償制度が適用されます。

(6) 所属先のある方には人件費などの補てん制度があります。

10．問い合せ先：

【シニア海外ボランティアについて】

国際協力事業団　青年海外協力隊事務局

シニア海外ボランティア事業係

〒150－0012　渋谷区広尾4－2－24　広尾訓練研修センター内　TEL 03－3406－5273

（国内問い合せ先は、青年海外協力隊と同じ）

国際協力事業団　沖縄国際センター

〒901-2552　沖縄県浦添市字前田 1143 番の 1
電話：098-876-6000
FAX：098-876-6014